晁山勝概

卷之二

2913
N775K

帝国図書館蔵書

荒山勝概卷之二

内區之二

二荒山神社（祭神大己貴命）

社傳を按ずるに今を距る事二千年餘の昔崇神天皇の御宇皇子豊城入彦命親ら崇祀し奉る云云是叡祀の緣由也其後平城天皇の大同三年沙門勝道威靈の感格に憑り荒尾山の清地を卜し始て社殿を建立し祭祀をる處の神に乃ち大己貴命田心姫命味耜高彦根命是也其年朝廷祈願の事ありて應報のため橘利遠に勅して社殿を改造せしめらるゝ累年洪水逆逆の時に方り社地の東岸崩壞し

わたなべ

帝国図書館蔵書

国立国会図書館
26.2.1

223747

て危況ふ逼る之ふ於て仁明天皇の嘉祥三年社殿を恒例山ふ移せ是より旧趾味耜高彦根命を本宮と称し遷座の社殿大己貴命を新宮と唱ふ是より先

續日本後記云承和三年十二月授下野國從五位上勲四等二荒神社正五位下

同八年四月奉授下野國正五位下勲四等二荒神正五位上

同十五年八月廿八日授從四位下

文德實錄云天安元年十一月在下野國勲四等二荒神充封戸一烟

三代實錄云貞觀元年正月廿七日授下野國從三位勲四等二荒神社正三位（從四位下以上從三位迄の位記古史ふ見へ代）

同七年十二月廿一日授從二位云云

同十一年二月廿八日授正二位云云

以上七回の勅宣あり（方今正一位勲一等と称せ共何れの御宇ふ位記勲等と進めらるしや古記の爾来數多の變革と經て建保三年但徴せべきなし）

馬法印辨覺鑑倉將軍ふ請ひ當今の地とトして新ふ神殿を造營せり此時ふ當りて天下の形勢穩ならぬ爾後四百餘年の間兵乱止時なく祠堂殆と頽廢ふ帰せんとせしと元和三年東照宮遷座あるふ及て廢

を興し同五年殿堂唐門等より至る迄悉く新營せらるる後三代將軍家光公更に之を改造せらる旧時に比べ甚だ壯觀を增こと數層明治六年勅して國幣中社となし自今官祭仰出さる云云

新宮馬場　東照宮の表門外なる五重塔の前より真直に二荒山神社へ至る大道を云ふ長さ二町許此所は東に東照宮の宮殿高く耀き馬場の両辺は老杉鬱々として頗る幽邃なり一たび歩を進むれば実に仙境に遊ぶの思ひをなさしむ

唐銅鳥居　新宮馬場の行詰りより其高さ二丈二尺周圍六尺五寸扁額に二荒山神社の五字を掲く有栖川左府宮の染筆なり元来新宮にハ鳥居の無りしを元禄八年三佛堂後の杉と四本伐木して建設し其後寛政年中唐銅に改めらるしと云ふ

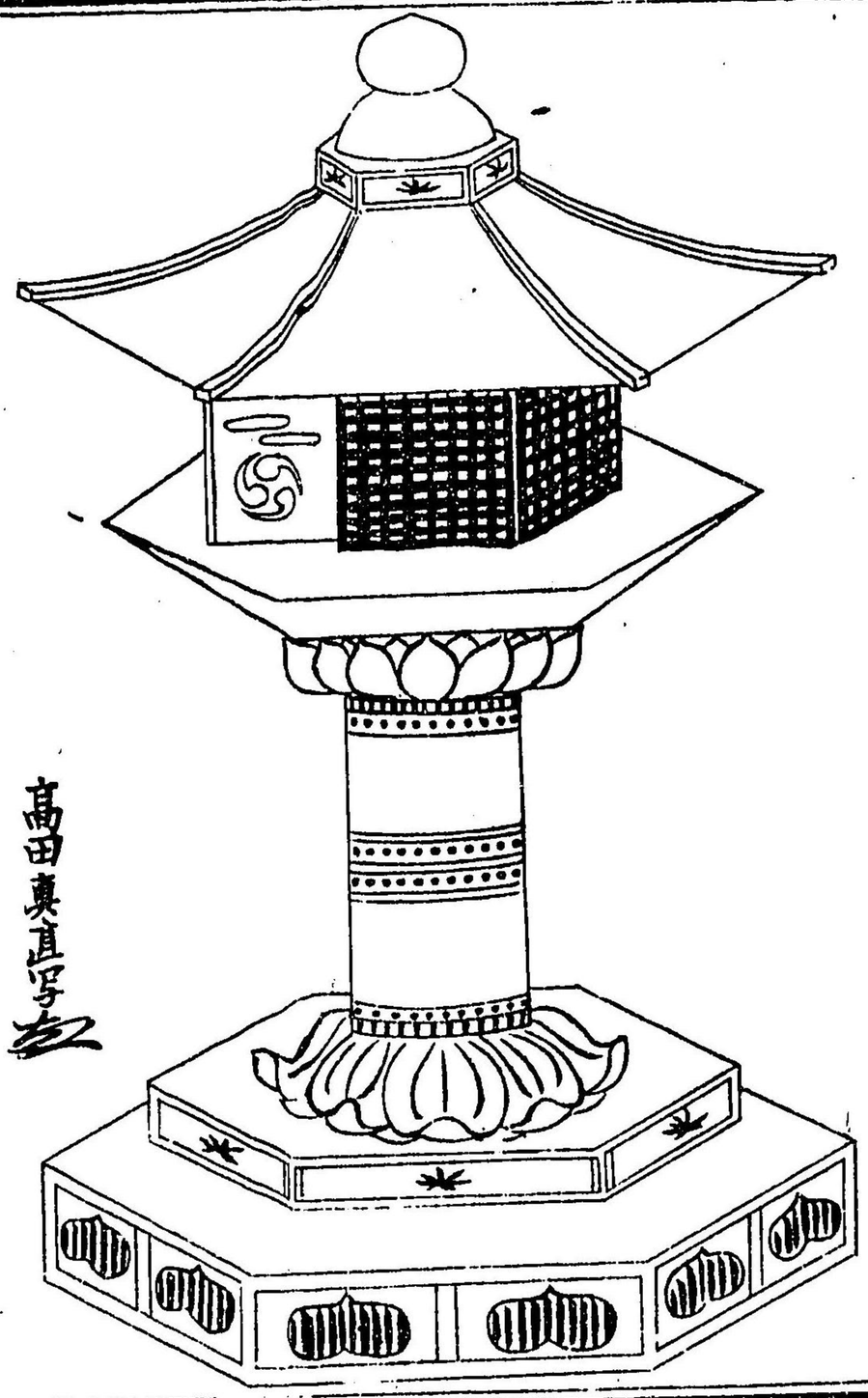
社務所　唐銅鳥居の北辺にあり昔の別當所ハ安養院と云ふ寺にして東照宮の社家一觸なるもの社務を司どりしが明治革新以後社務所を新築し宮司を置て社務を總掌せしむ

拜殿　社務所より西に當る方位南に面し桁行七間半梁間六間餘四方椽大床舞臺造り惣上瓦なり

唐門　拜殿と本殿との中間にあり間口一間半惣黒塗なり此門の左右より銅葺の瑞籬を廻らし前へ十五間奥行十八間にして本殿を圍む

本殿　五間四方八棟造り柱へ金襴巻外承塵の上ハ草花の極彩色唐戸へ臘色に滅金の金具を施し高欄濱掾共に朱塗にして後へ折廻し殿内へ前の一間通を内拜の處とし其内へ内陣なり内陣の左右に當社の寶器を陳列し正面に玉簾を垂し金幣を捧げて庶人に禮拜せしむ

唐銅燈爐　唐門外の西南角にあり左圖の如し其高さ



七尺許土俗之を化燈籠と呼ふ何の所為う今猶數多の刀痕を見る正應五年鹿沼入道敎阿の獻寄もる所入道ハ佐野家の一族世々鹿沼ゟ居城し日光神領の惣政所として當國拔群の名家なり燈柱の銘ハ

奉冶鑄

新宮御宝前　御燈燈爐一基

右志者為二世悉地成就圓滿也

利益普及群類矣

正應五年壬辰三月一日

願主　鹿沼權三郎入道敎阿

大工常陸國三村六郎守季　并清原氏女敬白

高野槙　拜殿の傍ゟあり高く方形の石柵と廻らせ相傳ふ弘法大師登山の砌苗木と高野山ゟ齎らし来至て植る所なりと其實否ハ暫く措て問ハゞ此槙幹高うらしと雖も三四株ゟ今迄自ら老骨を現をして實ゟ千年前後の古木と思をる

三本杉　拜殿の西南隅ゟあり則二荒山神社の神木也昔の社殿ハ神木の前ゟ在て東向なりしが正保二年改造の砌社殿の向を替て北の山際へ曳きとるゟよ

223747

至斯く神木も正面に現出とゝなり

神寶

瀬昇太刀　鞘皮巻一腰

稱々切丸　鞘皮巻一腰

杖珊瑚樹　一本

琵琶　錦玉蕉　一面

水晶寶塔　一基

小山氏寄納兜　一領

柏太刀　三振

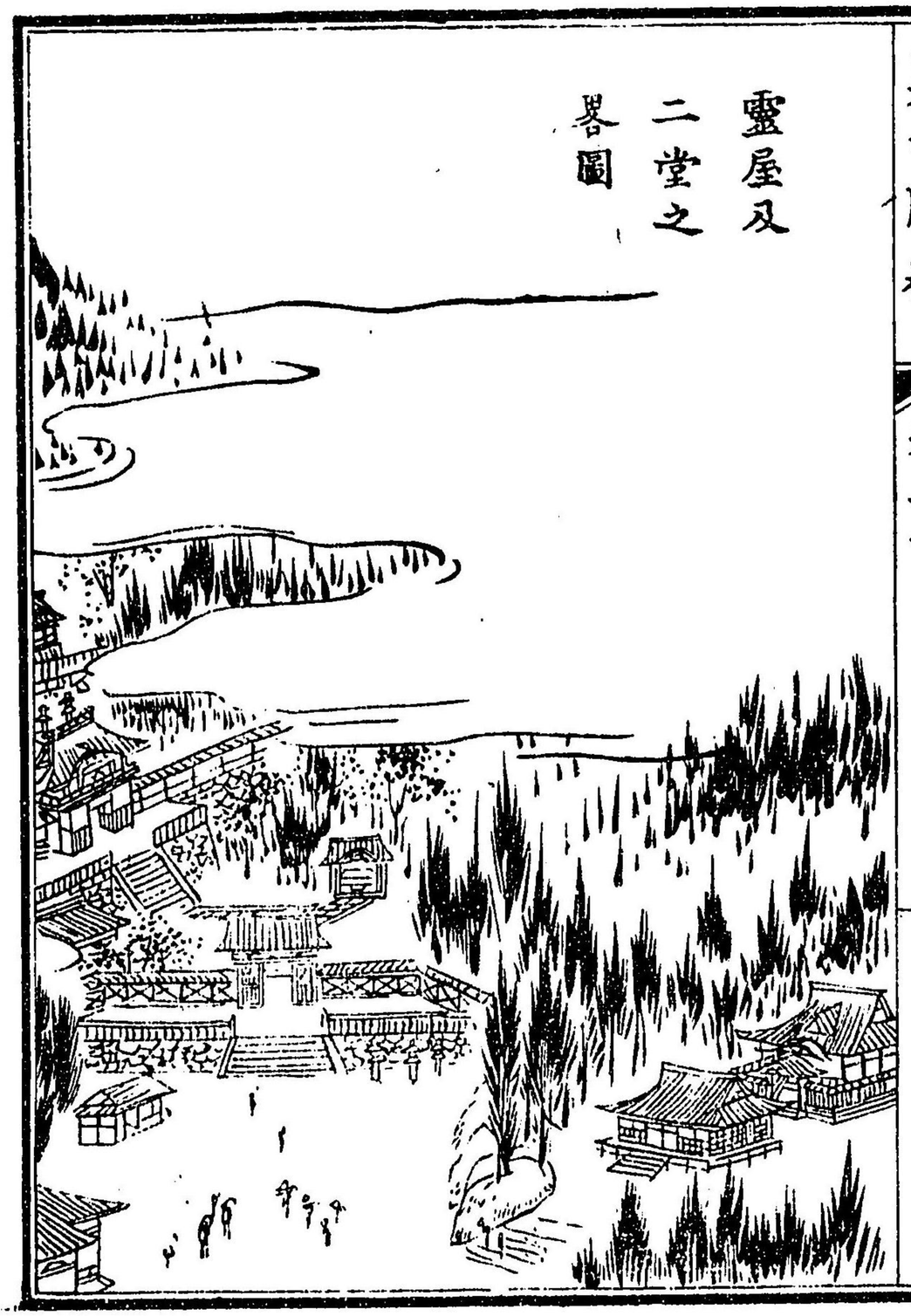
此他寶器數多あるとゝ之を畧す

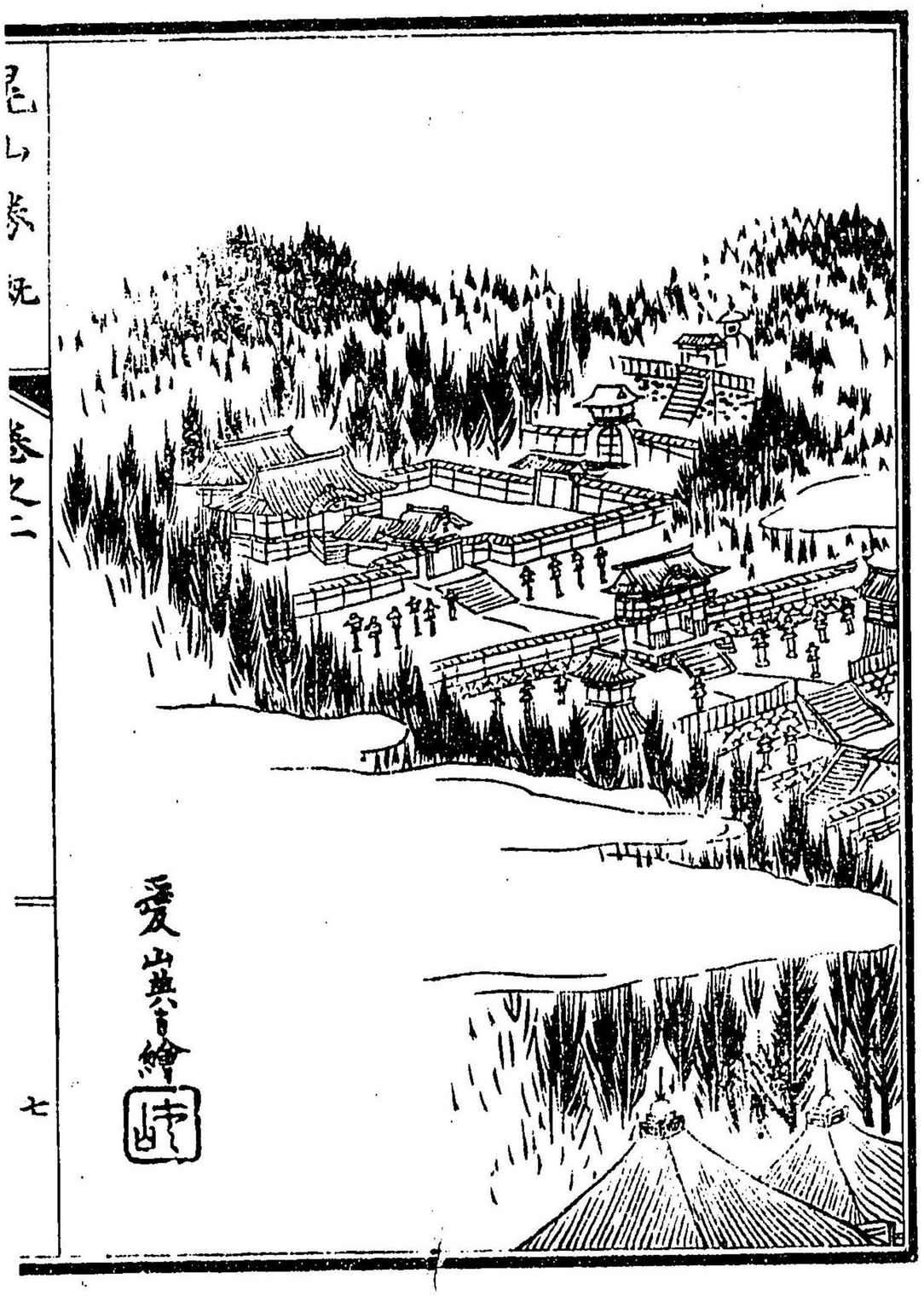
末社　本社の圍外に十餘の社堂ありしとゝも今皆廢して御友神社と稱する一社存するのみ

例祭　昔は三月朔日二日の両日なりしが今は四月十七日に改む年々より東西町々の人民邂逅狂言附祭等と出し皆々戯藝を盡して頗る盛なる事なりと當日神輿は本宮へ渡御あり古例の祭儀終日は直ちに還御の事なりと云ふ

緋櫻　二荒山神社前なる坂の下通る四五株あり此種男躰山に多く珍木の苗なるゝ山上に在ては其色真紅なるに共麓へ移せは色薄く咲といへり

靈屋及二堂之畧圖





常行堂　御殿地脇なる新道を出抜き北ハ左方ハ常行法華の二堂並立せり大なるハ常行堂小なるハ法華堂なり共ハ宝形造り此両堂の間ハ歩廊を設て法務ハ便を又此歩廊を潛りて南の坂路を登れハ慈眼堂ハ至る偖常行堂ハ大間十間四面内椽の正面ハ維摩居士の木像あり本尊ハ寶冠の阿彌陀左右ハ四菩薩須彌壇下の左右ハ傳教慈覺の両大師後堂ハ波之利大黒及摩多羅神を安置し両側の大床ハ無數の諸佛諸菩薩を排列せり此二堂ハ慈覺大師叡山ハ模擬して之を揪建し天台一派の法流を擴め衆徒を分て一ハ法華三昧の行儀を修し一ハ常行三昧の法儀を行ハしむ當時鎌倉右大將家の崇信を得常行三昧修行の燈油料として文治二年當國寒川郡ハ於て十五町の地を寄附せらるを尋て右府家より水晶の念珠等を寄らるをとりさまバ古くより頼朝堂とも称せしならん往古此堂揪建の地ハ佛岩の辺東照宮表門内三神庫辺ありしが元和年中東照宮の宮殿造營ハ際して此所へ移さるをとり云ふ

法華堂　常行堂の西ハ並ふ大間六間四面なり起立年代の事ハ前ハ同し本尊ハ普賢菩薩左右ハ十羅刹及

鬼子母神前の大床みハ正觀音及軍及利明王を安置
を後堂ハ傳教大師書寫の妙典一部を納むと云ふ

靈屋（徳川三代將軍家光公廟）

公ハ慶長九年七月江戸城ハ生る元
和九年八月八朝して位正二位ハ進ミ官内大臣ハ遷
る征夷大將軍ハ任ぜらる寛永九年正月前將軍薨を
ハ及て盡く天下の諸侯を大城ハ招き之ハ諭して
曰く我祖考卿等の力ハ因て天下を定む故ハ禮待を
加る事譜第の將士と同じからに家光ハ至てハ襁褓
已ハ天下の主とり自ら祖考と異なる者あり今より
卿等を待つ譜第と同くをべし若し心ハ厭ク也んば

三歳の暇を給せん各々國ハ還り熟思して去就を安
せよと諸侯皆逡巡して曰く敢て命を聽ざらんやと
是より權勢大ハ定り永く幕政の規謨を堅くをる者
ハ偏ハ公の聰明勇決ハ出る所也慶安四年四月七日
江戸城ハ於て薨に歳四十有八法諡を大猷院と号を
遺命ハ因て當山ハ葬る當時公の恩眷ハ感して殉死
をる者五人以て士と撫育をるの厚きを知るへし

二王門

常行法華二堂の前より西の正面ハ當る東南
ハ面せり桁行四間半梁間二間半三棟造り左右ハ右
彌那羅延金剛左輔密迹金剛の二王を安置せるを以

て二王門と名附く則靈屋の表門なり裏の左右ゑも同形の二王と安を是ハ東照宮の表門ゑ在しを明治六年此所へ移せうと云ふ

御手洗屋　二王門を入て右方ゑあり中央の水盤ハ御影石ゑて長さ八尺三寸幅四尺高さ三尺五寸覆屋ハ二間半ゑ二間四隅の柱ゑ御影石ゑして一隅ゑ三本共ゑ十二本の石柱を以て支ふ桁ハ木製ゑて金襴置揚の彩色天井ゑハ大なる龍を画けり狩野安信の筆なりと云ふ

寶庫　二王門内の左方ゑあり間口七間奥行三間内ゑ種々の宝器を蔵すと云ふ

諸家獻備燈爐　總數三百十一基内唐銅六十四基石二百四十四

唐銅燈爐ハ二天門の石階上より夜叉門内ゑ竝立し石燈爐ハ二天門下及二王門内外各所ゑ排列せり

二天門　二王門より數歩ゑして左方ゑ時つゝの是也東北ゑ面せり桁行五間餘梁間二間餘二重扇垂木三手先造り前後の破風下ハ双頭の貘を彫り扁額ハ後光明帝の宸翰大猷院の三字なり又上段ハ手先より丼組ゑ至る迄極彩色下段の丼組ハ黒塗其間々ゑハ獅子犀等の彫物あり前の左右ゑ廣目持國の両天を

安置せるを以て二天門と名附く後の左右ハ緑色の風神と朱色の雷神とあり是ハ元陽明門の金剛捌内みあうしを移せるものと云へり

鐘楼　鼓楼　二天門を入りて右方の石階を登り更ゑ左折して登ハ左右ゑ鐘鼓の二楼對峙せ高さ各々三丈許銅板を以て楼腹を包ミ金鐺を打てり

夜叉門　鐘鼓二楼の間より正面ゑ眩耀せるもの是也桁行四間二尺梁間二間半唐破風造り両面の左右ゑ揵陀羅、毘陀羅烏摩勒阿跋摩、の四夜叉と安置せるを以て夜叉門と名附く前後の破風下ハ牡丹ゑ唐獅子其下通ハ金色の糸と組揚け臂木の間ゑ紅白の牡丹と彫刻せ柱ハ十二本朱塗ゑして胡麻殻状ゑ削り成し桁ハ殘らず地紋と彫る梁鼻ハ貘頭及獅子頭を彫出し天井ハ格天井の内ゑ唐木ゑて圓環を作り中ゑ牡丹の折枝と刻む門扉及羽目ハ金地ゑ牡丹唐草の透彫其他都て牡丹唐草と彫るゑ故ゑ牡丹の門とも唱ふる由而して垂木柱一二の箇所と除くの外ハ滿門悉く金の押箔ゑて装飾せるゑ故ゑ光輝四方と射る左右の袖屏ハ前の羽目ハ堆朱の完龍裏ハ牡丹上の欄間ハ金雞下の蹴込ハ激浪の彫物なり此袖屏ゑ續き

永く廊と設て左右の石垣より達し此門以内ハ両辺より
至本殿の背後と廻り方形ふ數丈の石垣と築まあけ
上ハ老杉森々として殊ハ靈威の嚴々なるを覺ふ古
来晃山の靈場と記せる者前後幾篇なるを知られ然
るとも一ハ靈屋の内部ハ及ぶ者なきハ何ぞや蓋し
故あらん

朝鮮國獻備燈爐　夜叉門内の獻備燈爐二十二基中ハ
此燈爐二基左右ハ對立せ唐銅製高さ各々一丈餘り
明晉元年の獻備ハ係る燈柱の銘ハ云

日光山燈籠銘并序

曩歳獲聞　日光山中為　東照大權現廣設道場
既已鑄送法鐘以彰誠孝今又聞　大猷院殿真宇
竝建遂冶成燈籠轉達靈山用助崇奉之具仍讃永
慕之意而為之銘曰
誕樹功德竝參諸天道場既闢慧燈方懸
範銅作籠俾護神光爰實法筵吐焰熒煌
孝思無方冥福是薦寶坊長明金輪永轉
乙未年正月日
朝鮮國司憲府大司憲蔡裕後撰
知中樞府事吳　竣書

唐門　夜叉門の正面なり間口一丈五寸前後の破風下ハ雌雄丹頂の鶴平桁上ハ白龍の丸彫なり前の両柱ハ丸の金巻後の二柱及桁梁共ハ金地ハ地紋を彫り天井ハ折揚の格天井ハ菊の折枝を刻む門扉ハ金地ハ唐草羽目ハ牡丹唐草の透彫金具ハ都て帛紗滅金又左右の袖の羽目ハ白地ハ秋の七草を彫刻ハ是ハ皇内ハ間廊下と設け席を敷て直ちハ拜殿ハ至る

瑞籬　唐門の左右より後へ折廻して拜殿本殿を圍む羽目ハ地紋を透し上の欄間ハ松竹梅椿及種々の草花ハ群鴿と刻む俗ハ之を百間百色の鴿と云ふ下の蹴込ハ菊唐草両面の彫物なり

拜殿　東北ハ面せり桁行九間梁間三間半千鳥破風及向拜あり千鳥破風の枇杷板ハ牡丹ハ唐獅子向拜の破風下ハ牝牡の金獅子也其四柱ハ金巻の角柱ハし て四面の中央ハ長く白色の菊唐草ハ彫る虹梁上ハ松ハ鷹手挾ハ菊の籠彫象鼻の獅子頭ハ堆朱の巻揚ハうと云ふ簷頭ハハ滅金の釣燈六四個を掛け垂木及下の升組ハ臘色ハ七寶鎔の金具を施し其下通の欄間ハ四面悉く松ハ鷹の彫物なり唐戸ハ三扉共ハ金地ハ龍及獅子を彫り其左右より後へ折廻して上

部を設く又殿内の結構い疊數六十三疊中央ゑ滅金の天蓋を掲け其下ゑ金梨子地の高机及三具足を備ふ天井ハ折揚の格天井ゑ岩緑青を以て丸龍を画き内承塵の上ハ桐ゑ鳳凰の浮彫をう正面の左右なる金壁ゑ獅子を画く右ハ探幽左い安信の筆をる處と云ふ両傍ゑ朝鮮國よう獻ぞる玳瑁の釣燈を据へ其左ゑ同國獻備の樂器を陳列せり相傳ふ此拜殿本殿の彫物ハ探幽の素圖ゑして當時名工の彫刻ゑ係ると故ゑ其精妙なる筆紙の能く尽を處ゑ知られ加之殿の内外都て金彩を裝ふゑより拜覧の人眩耀魂を奪いる

間室　拜殿本殿間の一室を云ふ間口二間二尺奥行四間半許正面ゑ香爐を据へ左右ゑ燈篭を置き燈篭ゑ次き燭臺一對燭臺ゑ次き蓮華の花瓶一對之ゑ次て銀櫻銀柳の花瓶を排置を是徳川三家及加州家より獻をる所此格天井ゑ鳳凰を画けり

本殿　間室よう續く方五間半許佛殿造り二重屋根左右の破風板ハ金の向龍枇杷板ハ牡丹其下ゑ双頭の犀を刻せり殿の周圍ハ悉く彫物ゑして金彩を施せ室内扉ハ常ゑ鎖して其前ゑ金梨子地の高机を据へ

上ハ滅金の天蓋を掲く内扉の内ハ壮厳赫灼として
大猷公の霊牌を安置せと聞けり
上供所　本殿の西南角ハ接續せ五間ハ三間許常人の
入を許さず
包裏門　本殿右側の瑞籬ハ連接せ間口九尺許是本殿
より奥院へ通行の門なり
皇嘉門　包裏門と廻尺を則奥院の入口門也是ハ朝廷
より賜ハる門の名なりと云ふ樓腹い白堊を以て築
造し内外の桁ハ堆朱ハ地紋を彫り天井ハ天人を
画けり此門の構造ハ他の門と異なり俗ハ之を龍宮
造りと唱ふ門内ハ二條の石階あり左ハ寶庫ハ至り
右ハ奥院ハ詣るべし
奥院　皇嘉門内の石階を登り右折して更ハ登れハ奥
院拝殿の前ハ至る入口ハ石柵を設け左右ハ唐銅の
手桶ハ銅造の蓮華を挿む拝殿ハ東南ハ面せ桁行五
間梁間三間殿内の中央ハ天蓋を掲けて下ハ高座を
据へ左右ハ厨子入の佛像を安置せ又殿後廻尺の所
ハ石垣を築き正面ハ唐銅鑄拔の堅門を設け其両袖
より圓筒の石柵を廻らし中央ハ黄銅製の寶塔を安
せ高さ一丈許基石ハ八角五級なり都て奥院の構造

ハ東照宮の奥宮と異なる所なしと雖も境界稍狹く
して鑄拔門外ハ銅造の獅子と見て是祖先ハ一歩と
譲る所ゝ

供所旧の別所　龍光院と号し二天門の西ハあり是靈屋の
為ハ剏立せる所なり此中庭より靈屋へ至るの石階
と御供坂と称せり

阿部空煙墓碑　二王門内御手洗屋の北方石柵の外と
外圍との間ハあり阿部豐後守忠秋の墓なり石碑い
小なる自然石ハして空煙の二字を鐫る上覆ハ石ハ
て八角ハ作り高さ三尺許前ハ窓を彫透して空煙の

二字のミ見ゆるやうハ作為せり氏い幼より恪勤懈
らず徳川第三世及四世の両將軍ハ事へて政を輔る
こと三十餘年廉介を以て自ら持し請詭と杜絶し其
言行一ハ忠恕ハ本つく古大臣の風ありと故ハ恩賜
年ハ加へて俸十万石ハ至り宿老職ハ補せらる寛
文十年致仕し延寶三年五月逝し法諡ハ透玄院天國
空煙大居士と号し蓋し此靈屋近傍の地ハ葬るい宿
願ハ出ると云ふ

梶氏墳墓　靈屋の奥院近き御堂山ハあり左兵衛督源
定良の墓なり石碑いハ光形ハして上ハ梵點一字下ハ

従四位下掃左兵衛佐源朝臣定良照光院月嶺圓心大居士と真中に鐫し右に元禄十一戊寅年左に五月中十四日と刻せり四辺に石柵を廻らし傍に大學頭林衡撰文の碑あり其畧に云く君幼にして慧敏武備を尊て聲色を喜ばに若冠より大猷大君に事へて頗る恩眷を蒙る大君薨るに及て遺命して當山に葬らしむ君靈柩に扈従し遂に留りて家に是より四十七年毎旦雞鳴初て起嗽浴戒潔し物色を辨るに及て朝に詣り獨殿前に座し俯仰齋慄儼として存に事ふ如し冬春の交に方り凍風寒雪の中に立躰僵直口噤るに至るに敢て已に元禄十一年五月病て卒る享壽八十有七大猷大君塋域の後に葬る蓋し其志を成るり水戸義公文を為りて之を祭りて云く曾聞孝子廬親墓者未覩忠臣廬君墓者乃今於居士乎見之云云居士晩年突然左右に語て云く江戸に於て阿部空煙に殁せしならん我彼に死後をとりと左右の者其所以を知らに果して三日を經て空煙の柩を送り来るりと亦奇と云べし

慈眼堂天海大僧正廟　傳に曰く師は奥州會津郡高田郷に生る姓は三浦氏天海と号る初め父一子なきを憂て月

天子に祈る其妻瑞夢に感して姙むことあり九月に
して誕生を幼より經世を樂まに誓て薙染を求む歳
甫て十一本邑の辨譽師に依り顕密の二教を習學し
後皇舜僧正に謁して終に大器となを天文年中園城
興福の二道公に隨て聰明論及唯識因明を傳ふ慶長
四年喜多院に住し尋て宗光寺に遷る東照神君深く
其德を欽慕せら主命して天台の南光坊を主宰せし
め慶長二皇勅して大僧正に任し山科の毘沙門堂に
住せしめ親く輪墨を御して寺額を賜ふ衆皆之を榮
とを同十八年台命に因て當山に瑞世し鐘鼓一聲山

川色を改む人皆中興の祖と仰く寛永二年二代將軍
秀忠公東叡山を闢て大伽藍を建立し師を請して開
山と為を同七年秋病に感ずることあり自ら起ざる
を知り禱を覓めに湯藥を嘗に一日水を索めて嗽ま
威儀を具へて佛を拜し且徒弟を誡て曰く汝等世の
浮沈を事とを勿れ一に宗教を提唱せハ足なんと
言畢て從容として寂を実に十月二日なり春秋一百
又六語に曰く仁者ハ壽と其師の謂乎慶安元年謚と
慈眼大師と賜ふ

文珠堂　常行法華二堂の間より坂路を登る事二町許

よして赤庫の前ゟ至る夫より右ゟ向へハ八口門也
堂ハ門外の左ゟあり四間ゟ三間許總上部則大師の
本地堂なり

供所　文珠堂の南ゟ接そ七間ゟ二間素木造り

求聞持堂　供所の南ゟあり虚空蔵を安置そ

唐銅燈爐　一基門外の左ゟあり無名なれ共其傳を得
ざるとゝ或ハ将軍家の寄進とゝいへり

阿彌陀堂　門内の左ゟあり三尊の石像を安置せ後ゟ
白字ゟて晃海和尚の銘文を刻せり

功徳水　拜殿へ登る一段下の左方ゟあり御手洗井也
常ゟ井桁を鎖して汲ことを禁ル

鐘堂　門を入て右ゟあり鐘径二尺五寸慶安元年大師
の上足公海僧正師徳報謝の為ゟ自ら鐘銘并ゟ文を
記して寄進せる所なり

経蔵　鐘堂と相並ぶ三間ゟ二間内ゟ一切経及内外の
典籍を納置せと云ふ

地主神社　拜殿の東北ゟあり稲荷社なりと云ふ

石燈爐　十三基門内の左右ゟ並列せり徳川三家及ひ
諸家より寄進せる所なり

拜殿　方位ハ正南より少しく東ゟ向ゟ八棟造りなり

桁行五間半梁間三間半向拜は金色の鍔口を掲く前後の扉及上部は黒塗外長押の上通は金襴卷組物は總彩色所々九の内は二引の金紋を附る是は大師の定紋なる由三浦黨より出らるれは左もあるべし毎歳陰暦十月朔日建夜は論義を行ひ翌二日の正當日は一山總出仕して法華八講を修行すと云ふ

實塔　拜殿の廻尺を石籬外の正前に石にて作る高さ四尺長さ三尺許の前卓を据へ上に石の香爐獅子を安し左右に三尺許の花瓶を置き相並びて高さ六尺許の燈籠あり是又石造なり實塔は高さ九尺許御影石にて彫工を両脇と後は六部天梵天帝釈持國廣目、増長多門の石像にて護衛せり周圍は石垣の上に石の玉垣を廻らして入口を設けは是人の登ると禁ぜる為に經營せしものなりと云ふ

座主宮廟　門内阿彌陀堂の脇より左の石階を登りは禮拜所を設く三方に石垣を築揚上に石籬を折廻し其内に實塔十二基を安せり蓋し尊骸は皆東叡山に歛山と云ふ

安養坂　常行堂の脇より西谷の方へ通行する沢道を云ふ此東北の谷より流れ来る谿水を古より安養沢

と称せる由依て坂の名も安養坂と唱へしと云ふ

善女神谷　安養坂の下通を西山谷と云へ夫より西町の入口迄を善女神谷と云ふ此地ハ青龍の社あるを以て斯い呼なせりと旧幕府の頃ハ此辺ハ奉行屋敷組頭屋敷火之番屋敷及坊舎等もありて盛なる土地なりしを明治維新の變革ハ遭遇し加るハ同七年の火災ハ罹りて現今の姿となりしとぞ

青龍神社　西町入口の山際ハあり此社の初ハ弘法大師入唐の砌天台山青龍寺の鎮護神ハ佛法東漸の事と祈り帰朝の後佛法守護神として醍醐ハ勸請し青龍權現と崇めしとぞ當山も大師登山ありて真言の顕密を傳へられし故其流下の僧等佛法擁護のため醍醐より勸請せる神社なりと云へり

西町入町と小山内西方ハある市街の總称なり

四軒町　原町　袋町　本町上中下　大工町上中下

板挽町　以上十町也往時ハ此町々縦横ハ區を分ち肆店軒を並べて尤も繁盛の所なりしを明治改革以来漸く衰へて鉢石三町の盛なるハ及ハに

妙道院旧跡（寺地の辺方今原町と唱ふ共田沢と称せり）佛龍寺と号ス元和七年天海大僧正中山の地ハある釋迦堂を

佛岩開山堂の下ゟ移し後寛永五年客殿庫裡等悉く建立ありて妙道院と号し一山の葬送修行の精舎ふ定めらる同十八年今の地ゟ轉營して法曼一流灌頂修行の道場と為る且元和年中より東照宮奥宮近傍ゟ立置るる諸家の石碑を承應元年此寺内ゟ移さ自今諸家の石塔所と定めらるる寺領二百石末山大四箇寺ありて堂々とる寺院なりしが時勢の變遷ゟ從て終ゟ廢跡といたる

釋迦堂　妙道院境内の西方ゟあり南ゟ面る七間四方宝形造本尊ハ阿彌陀脇士文殊普賢の座像其他恵心僧都の作三尊の阿彌陀及慈眼大師現存の肖像勝道上人の位牌等を安置る往時此堂ハ常念佛の道場ふして香花の匂麗らゝゟ称名の聲絶ざりしとなん

殉死墓碑　五基釋迦堂の西ゟあり大猷大君の恩眷を擔て殉るる所なり

玄性院殿心隱宗卜大居士　堀田加賀守紀朝臣正盛

芳松院殿全巖淨心大居士　阿部對馬守藤原朝臣重次

理明院殿光徳徹宗大居士　内田信濃守藤原朝臣正信

靜心院殿一無了性大居士　三枝土佐守源朝臣守恵

真證院理哲玄勇居士　真山茂左衛門尉藤原安重

以上五基共ニ慶安四年四月廿日と あり此他慶長十五年より寛文八年ニ至る迄諸家の石塔十八基併て六三基二行ニ並列せり

延命地蔵　釋迦堂の表門より西の道際ニ小堂あり相並て小庵もあり此地蔵尊ハ勝道上人の作ニて湯元ニ安置せるを正徳年中此所へ移せりと云ふ

浄光寺　板挽町ニあり還源山妙覺院と号し則西町の菩提所なり此寺元佛岩谷ニありて浄光坊と号し六供僧の一なりしが應永年中故ありて善女神谷へ移せり又佛岩開山堂の辺ニ一山の墓所なる往生院と云ふ寺あり此地ハ當山の鬼門ニ方るを以て善女神谷へ移し後寛永十一年六供僧の坊と共ニ今の地ニ移せりと云ふさきハ其頃より往生院と浄光坊と合併して浄光寺と称せしよりや此寺ハ昔往生院の重寶なる弘法大師書寫の額を蔵せり長さ二尺二寸幅一尺五寸四分外椽ハ雲龍を彫り内ニ亦一欄を設く欄外ニ小梵九字（後世の作）欄内ニ妙覺門の三大字（大師の筆）と刻せり梵字ハ紺青地ニて妙覺門の三字ハ金色なり

下河原　長坂の下より西町へ通る道筋を云ふ南ハ大谷川の流ニ沿ひ北ハ南谷ニ接せ家屋疎らにして道

の北に稲荷の社あり又西町寄に昔東照宮の神馬を飼置し所あり今猶馬場形もあり厩跡も存せり

秋元氏墳墓　南谷照尊院境内にあり石塔は御影の角石にて高さ八尺許幅二尺三四寸表面の上に梵點一字其下に照尊院道哲恭安居士裏に秋元但馬守藤原朝臣恭朝寛永十九壬　千天十月廿三日と二行に鐫せ四辺は石の玉垣にて囲めり氏は東照廟造営の命を奉じ勤勞せる事多年猶永く神廟に事へん事を願い山内の一坊を此所に移して寺領百石を寄附し歿後の院号を以て照尊院と唱へしと云ふ

内區之三

本宮社（祭神味耜高彦根命）　日光三社の一なり社地は神橋より艮位に方る丘上にあり前は大谷の流に臨み東北は稲荷川を帶び老杉陰森として社地を圍繞せり始め勝道上人四本龍寺を此丘上に營み尋て南の清地をトして三社權現を勸請せ是當山社頭の權輿也大同年間橘利遠勅命を奉し社頭を新營して大觀を成と云ふ爾来明徳二年大永二年及永禄五年三回の火災に罹りて悉く焼亡せり同七年再興の舉あり後正保四年寛文四年両度修理を加へらるしく天和四年十

二月蓮華石町より出火して一山の堂宇大半烏有となり當社も亦末社を保せて類焼せり之を日光山大延焼と云ふ翌年公命を因て更に新營を乃ち當今の社頭なり

旧別所　本宮坂を右へ登ること中程の左に有り素木造則本宮へ給仕をする者の詰所なり

如法經堂　別所に接して東にあり往時は三十番神及敷曼座主の影像を安置せしが神佛分離以来悉く四本龍寺へ移して空堂となる

清水　別所の南の方往来の上にあり勝道上人始て登山修法の時閼伽の水を汲まし所なりと是當山第一の霊水といへり

笈掛石　拝殿へ向て左にあり高さ三尺五六寸此石は冬峰行者出峰の時笈を立掛る故に名附と

本社　拝殿　共に銅葺赤塗也此両殿の間に中門を設け其左右より玉垣を廻らして本殿を圍む

三層塔　本宮社の後にあり相傳ふ此塔は昔鎌倉將軍實朝公の建立なりと初め東照宮の社辺にありしを松平正綱の計らひにて此所へ移せしに天和四年の火災に罹り其後再建せる所といへり

三面大黒木像　三層塔の傍ら安置元い本宮の別所ふ
ありし物なり初め傳教大師佛法擁護のため叡山ふ
安置せるを當山ふてゆ之と模造して各別所ふ安置
せりと云ふ

紫雲石　三層塔の西南咫尺の所ふあり徑四尺許の平
石ふて周圍ふ木柵を廻らせり往昔此辺ふ紫雲棚引
觀音大士の出現せるを以て名附しと云ふ

四本龍寺　三層塔の西ふ並ぶ五間四面宝形栃葺素木
造り中尊い千手大士左ふ五大尊右ふ勝道上人自刻
の肖像を安置則是道上人開法の旧刹也相傳ふ上人

未だ草庵ふ在し時毎夜神人来り告て曰く此北嶺を
四神峰と號し東い青龍南い朱雀西い白虎北い玄武
の所住也云云之ふ於て一坊を設て四本龍寺と号せ
り大同年間橘利遠勅命を受て改造せるふより始て
寺觀を大成し爾来数多の變革を經て現今の位置ふ
居たりといふ

唯心院　四本龍寺の西方東山谷ふ在り正保二年橋本
坊を改め古の衆徒の称号を立てゝ唯心院と号し此
所い勝道上人最初ふ草庵を結い住さる旧跡ふして
中庭ふ禮拜石と云ふあり徑四尺許の平石ふて是い

昔紫雲石の方ふ當り千手大士の出現ありしを上人此石上より禮拜せらしふ依て名附と又寺の西方ふ硯石と云ふあり高さ四尺廻り九尺許の大石也是ハ上人所持の硯を此石の下ふ埋めらるし故ふ名附と又東北の立ふ上人の高足仁朝僧都の石塔あり五輪形ふて如何ふも千年餘の古物と思ハる好事の雅客い必ず一覽あるべし

小玉堂　佛岩谷ふあり弘法大師の建立なり相傳ふ弘仁十一年九月大師瀧尾ふ於て佛眼金輪の法を修を一七日結願の夜池中より一小白玉と現を是天補星なりと因て一宇を建立し其白玉を崇めて小玉堂と稱せりと云ふ

彦坂光正墓　佛岩谷田護光院の境内ふあり塔ハ角形の五輪ふして總高さ五尺七八寸胴石ふ護光院殿正宗居士其左右ふ寛永九壬千年二月廿九日と記せり氏ハ通稱と九兵衛上号を初め駿府の町奉行より進て紀州の附家老となる家康公薨去の後職を辭して當山ふ投じ髮を削り庵室を結て神廟ふ奉仕をる事數十年慈眼大師号を護光院と賜ふ歿後該庵を衆徒の一寺と為て護光と号せり

教旻座主墳墓　旧大樂院庫裡の辺ふ塚あり往古より座主の墓なりとて不浄を禁じ崇敬せり此辺い勝道上人の墓ゟも近く昔い小笹のみありし所と云へり東照宮迁座後別所と經營せらるゝ砌も謂ある塚なれば其侭ゟ置ましものと見ゆ師い勝道上人の工思ゟして上人の統を継き嵯峨天皇の弘仁八年始て座主の宣旨を拜賜を道上人ハ宣旨無まい座主といい云ハに只開祖とのみ称を故ふ當山の座主職い師を以て始祖とを

佛岩　東山谷より北へ續きて旧寺院坊舎のありし辺を云ふ往昔西の山際ふ佛像ふ似とる岩三四個ありしゟ山崩まて其岩陷没せりと然まとも古くより此地の名称とハなまりとを

開山堂（一名地蔵堂　勝道上人廟）　東照宮奥宮の東佛岩の地ふあり堂い東ゟ向ふ六間四方二重宝形造り四面ゟ扉有て間毎ふ窓を設く堂内ハ石甃ふして正面ゟ開光院の額を掲く一品公遵親王の染筆なり中央ゟ地蔵菩薩の座像を安置を丈け五尺許運慶の作と云ふ須彌壇上厨子の中ふ勝道上人の影像を安し左右ふ十弟子の像を排列せり蓋し此辺を離布畏所と称せる者い

上人荼毘の地なるを以て名づ

草創建立記曰、勝道上人下毛野國芳賀郡之人俗姓若田氏也其先者人王十一代活目入彦五十狹茅天皇第九皇子池速別命其十八代之孫称高藤介歎無一子祈當國伊豆留觀音結願霄夢三尺余白蛇金鉢捧来而與焉其形八葉中納白玉以藤糸纏之不經幾日其妻懐胎天平七年四月廿一日日中産出焉童名蹄藤糸於幼稚時造石塔砂堂崇神拜佛因茲諸童子名云與寺年七歳而供香花於天夜中神童来而云吾是天上聖衆明星天子也汝可興行佛法者也故授汝無師智云云天平勝寶

六年廿歳之時夜偷到伊豆留岩窟念千手觀音誦三帰四弘法既送三春秋已天平寶字元年十一月八大紵峰深洞又送三年同五年正月到于當國大山鄕藥師寺不圖見如意僧都唐人惠雲律師唐揚州人等称善哉々々終隨律德廿七歳於藥師寺剃髪受沙彌十戒七十二威儀名嚴朝而後自改蹄勝道天平神護元年三十一歳出寺帰大紵峰同二年三月上絶巔顧四方當北山四色雲常聳空中作奇異思向北方尋求到當山麓有一大河欲渉不容易于時上人誦三帰并求聞持呪即從河北涯化神出来故右手二蛇二蛇即亘河上其形如虹霓為橋上人渡蛇

橋屆北涯則遂宿念結草庵勤行焉有夜異人來語此所
來由於此建堂號四本龍寺矣神護景雲元年欲見絶頂
攀躋高巔歷四十里許於嶽半腹有一大湖宿湖北岸經
行念誦又欲登頂上路險雷吼振動更不得上從半腹還
降同五月還本龍寺送十四箇年又天應元年四月起先
志欲到山頂霖露霧雖不得陟同二年三月率徒弟等至
湖宿精勤修行一七日遂達山頂顧四方靈瑞銘肝膝區
驚目經三箇日降湖宿又還本龍寺次延曆三年詣湖宿
造船長二丈廣三尺棹湖遊覽先止南湖後住北涯同四月屆南
湖歌濱見蛇人次至西湖現金色千手觀音同五月與徒

弟等相議建神宮精舍號中禪寺同七年五月移南涯結
草庵勤行其前有小嶋上人暫住其嶋禮拜懺悔祈聖朝
安穩柏原天皇聞之感令任上毛野國總講師因茲此
嶋名上野嶋矣大同二年夏旱颷青苗悉枯乾國司奉屬
上人令請雨故上山頂祈又至江尻瀧念誦善神納受應
時甘雨霖々依之以當國土産永奉獻權現是當山興森
之起也大同年中於四本龍寺亦奉勸請權現祈朝家及
國民安寧云云弘仁七年四月詣中禪寺一七日夜念誦
讀經忽然三化神現一如天女以玉冠瓔珞飾其身一束
帶把笏一着狩衣負武具隅庭異類神扈從化神告上人

開山堂
徒弟廟
開山大廟
麓宮
陳陽石

山王
白山社
地蔵神
真宣圖

曰我是此山鎮神也師依宿緣而開此山公為本願主我成護法神俱守人法濟群生至盡未來際盟約去經三日出中禪寺室還四本龍寺同年八月本龍寺北去八九町有岩窟名離怖畏所上人至彼定入定所同八年遺誡徒弟三月一日行年八十三歳如入禪定入寂已畢

勝道上人墓　開山堂の後より西の方周圍の石の玉垣を廻らし中に高さ五尺許の五輪と安倍傍に徒弟の石碑なりとて小なる五輪塔立並べり又山際より毀損しと六部天の石像あり是は定めて廟内に安せしと毀損しとる故に山際へ移せるならん

産宮（祭神不詳或ハ云楊柳觀音ト）　開山堂の南の方にて周圍に玉垣を廻らし社前に鳥居あり土俗傳て姙娠の婦女將棊子の形を作り香車と書して社壇に納む生ハ安産なり事妙なりとて數多の棊子を納め置けりいつの頃よりの俗習なや章ハ向ふ事速なるの謂なならん又此辺に陰陽石とて二つの奇石あり業なるに此石ある故に産宮も起りしなり又ハ産宮の傍なるを以て陰陽石と名つけしならんか

瀧尾道　神橋より瀧尾社迄十八町と云ふ其順路ハ長坂と登り直線に本坊の東を通りて旧大樂院の門前

ふ至り夫より右或い左と同院の圍ひふ沿ふて行い開山堂の前ふ出つ（本文ふ滝尾道と記せしい開山堂より社頭迄と云ふ）是より八町許漸々ふ登り社頭迄敷石續けり此辺の左方ハ東照宮奥宮の山傳ふて懸崖高き十餘丈右ハ稲荷川の流ふ接し老杉雜木道を掩ふて日輝を見ぬ故ふ此境ふ入ると い盛夏と雖も凄涼膚を侵して爽快なり

天神社　瀧尾道左方の山際ふあり社頭ハ小なる石室ふして周圍ふ石柵を廻らし後の石ふ大なる梅鉢を彫り傍ふ寛文元辛丑年二月廿五日聖廟廿九世孫築紫安□寺住菅原姓大鳥居氏法眼信幽敬白とあり

手掛石　瀧尾の路傍ふ有る大石なり何ふ因りて名附よりや由来を詳らかふせぬ

神馬碑　瀧尾道の右ふ有り高さ四尺五六寸幅一尺二三寸碑面磨滅して慥ふ分らぬ此馬ハ慶長五年関原合戰の砌東照神君の御し玉ふ所と云ふ碑文中ふ大樹薨御明年致馬於此山歴十有四歳寛永庚午歳薨於槽櫪之間云云の文字灰ふ見へとり之と以て考ふ当ハ三十歳ふ超よるべく實ふ長壽の駿足と云べし梶氏其懐旧の情ふ堪へ碑銘と遺せりと聞けり

飯盛杉　瀧尾の道端ふ有る大木なり周圍二丈三四尺

枝葉枯朽して老幹の存するのみ是より數歩の所に
板門とて瀧尾の惣門なる鳥居あり一ツ先年朽倒る
て今ハ只礎石を見るのみ

瀧尾社（祭神田心姫命）　弘法大師の建立なり相傳ふ弘仁十一
年大師始て登山して四本龍寺の室に入り勝道上人
の遺弟教旻道珍等と俱に瀧尾に至り其靈境に感し
大杉樹の下に庵を構へて勤行を更に壇を設て秘法
を修せる事一七日既にして神女の冥勅を蒙る因て
神靈と中禪寺に祀り社壇を此崛上に淑立し自ら女
體中宮の四字を書して題額と為せりと此歳十二月
大師上洛して奏聞を遂け瀧尾を以て御願寺と為せ
當時嵯峨帝の御宇なるが中ふに嵯峨帝の御願寺と
称せりと云ふ

牛王橋　瀧の下流に架せる石橋なり此左方の山際に
山王の小社あり

不動堂　道の左石階の下にあり堂ハ二間四方栃葺黒
塗なり本尊ハ二尺許左右に二童子を安置せ共に運
慶の作なりといふ此脇より石階を登ること坂中に一
尺五寸許なる燒不動の石像あり又三笠赤倉の両小
祠を勸請せり

滄尾閣
香雲

瀧尾瀑布一名白糸滝　不動堂西北の岩上より飛流を高さ二丈許り此瀑へ古来有名の物なりとも尋常の小瀧ふして白糸の名よりも似たる或へ索麺瀧杯と唱ふる者もあるなと益々據所なし定て此輿を索麺谷と云より誤り傳へたるならん斯る小瀑布なりと田國雜記等よりも載てあるは一槩ふ塗抹をべきふあらた

舊別所　石階數級を登りて右方ふあり方今頽廢して假ふ二王及諸佛像を安し傍ら日光責の器具（祭棒大煙管類）を懸置けり往時此別所へ衆徒の内より五年替りふ輪持し又東照宮の社家二箇なる者社務を司る且又

當社の寶物珍器へ凡て此別所ふ藏をるが故ふ常人を入ざる坐席もあり又額の間とて弘法大師の筆跡女體中宮の古額（當時樓門ハ古額の字しなりとと）藏をる所も有て堂々たる別所なりしが時勢の變遷ふ隨て斯く頽廢せる事止を得ざる所なり偖日光責の古式へ當別所ふ濫觴せりといつの頃よや地藏人間ふ變じ来りて索麺と乞けるを責しより始まりといへり又貉いぶしの祭儀も此別所ふ原をと云ふ

因ふ云日光市中の風習へ祭典婚儀等の吉事ふへ来客ふ食物を強付て饗應をると例とを是皆日光

責の餘風ふ出る所と聞けう

如法經堂　別所の西ふ接せ方三間阿彌陀佛を安せ

影向石　經堂の西ふあり往時弘法大師登山の砌此石上より女體神影を拜さしと云ふ

石鳥居　樓門外十間許の所ふ建てり高さ一丈二三尺梶氏の獻寄せる所なり

樓門　三間ふ二間許總赤塗也弘法大師の筆女體中宮の額ハ此樓門ふ掲けありしと今猶額塚を存せ

拜殿　樓門の正面なり四間ふ三間總上部ハ黑塗他ハ凡て赤塗なり

中門　間口九尺許素木造り此左右より玉垣を廻らし

て本社を圍む門内本社の前ふ禮拜石と名附る平石あり徑三尺餘周圍ふ手摺矢來を設く土俗云ふ日光

責ふて氣絶せし者を此石上ふ置けハ忽ち蘇生せと

故ふ助石とも唱ふるとり又門外左右の石柵内ふ

篠を栽とり是ハ神箭を作る料なりと云ふ

本社　東南ふ向ふ桁行三間梁間二間大床造り二重樋

向拜あり柱ハ金欄巻前の三扉ハ黑塗其他彫物彩色

滅金の飾等頗る美麗なり

本地堂　拜殿の西ふあり二間四方赤塗なり惠心僧都

の作なる阿弥陀觀音勢至の三尊を安置せ

千手堂　本社の西ふあり二間半四方黒塗なり本尊ハ丈六の立像開祖上人の作なりと云ふ

多寶鐵塔　千手堂の後ふあり堂ハ一間四方内ふ鐵塔を置く高さ一丈許古色掬をべし塔内ふ普賢を安せ又塔腹ふ銘あり上欄ふ奉新造瀧尾山鐵塔光明院法印昌宣願主文月坊と下欄ふ文明二天庚寅三月十二日大工宇都宮住人大和太郎宗弘と記せり

三本杉　奥院の神木なり本社の後ふ當りて石柵を廻らし前ふ鳥居有内ふ障三百と号する石碑あり苔む

して字躰を辨ぜぬ則ち瀧尾權現の出現せる所と云へり相傳ふ此三樹ハ神代よりの古木なりしが中の杉ハ元禄十二年八月十五日夜大風の時倒れ右の杉ハ延享四年八月廿七日ふ倒れ左の一本ハ寛延二年六月十二日風無くして倒る其倒れとる物今猶存せ是周囲三丈餘り其朽幹ふ尺餘の雜木數本生茂れり方今の三本杉ハ古杉の倒れとる跡へ自生せる物と云ふ今既ふ長じて廻り八九尺ふ至れり

碑石　旧水戸藩の儒官森尚謙り撰せる所ふして瀧尾權現の靈異なる事を記せる碑なり碑文略

酒泉（本名功徳池と云ふ）　三本杉の西の方ふあり池中辨才天の小祠を祀る往昔池中より酒泉の涌出せるを以て名附とりと云へり

子種石　酒泉の西ふあり高さ五尺許徑六七尺四辺ふ石柵を廻らせ里俗傳て子なき女此石ふ祈ぎバ必れ効驗ありと云ふ是より下向道なり

筋違橋　此所ハ瀧尾の地界ふして則ち下向道なり此橋ハ用水路へ架せるる故ふ都て不淨を禁しめ傍ふ大小便無用の石票を建より橋の南なる坂路を登ぎハ直ちふ行者堂ふ至る

行者堂　筋違橋より登りて二荒山神社へ降る坂の頂上ふあり本尊ハ役小角左右ハ前鬼後鬼共ふ運慶の作なり此堂の脇より北へ入るの逕路ハ則ち峰修行者の禊頂せる首途の所とす

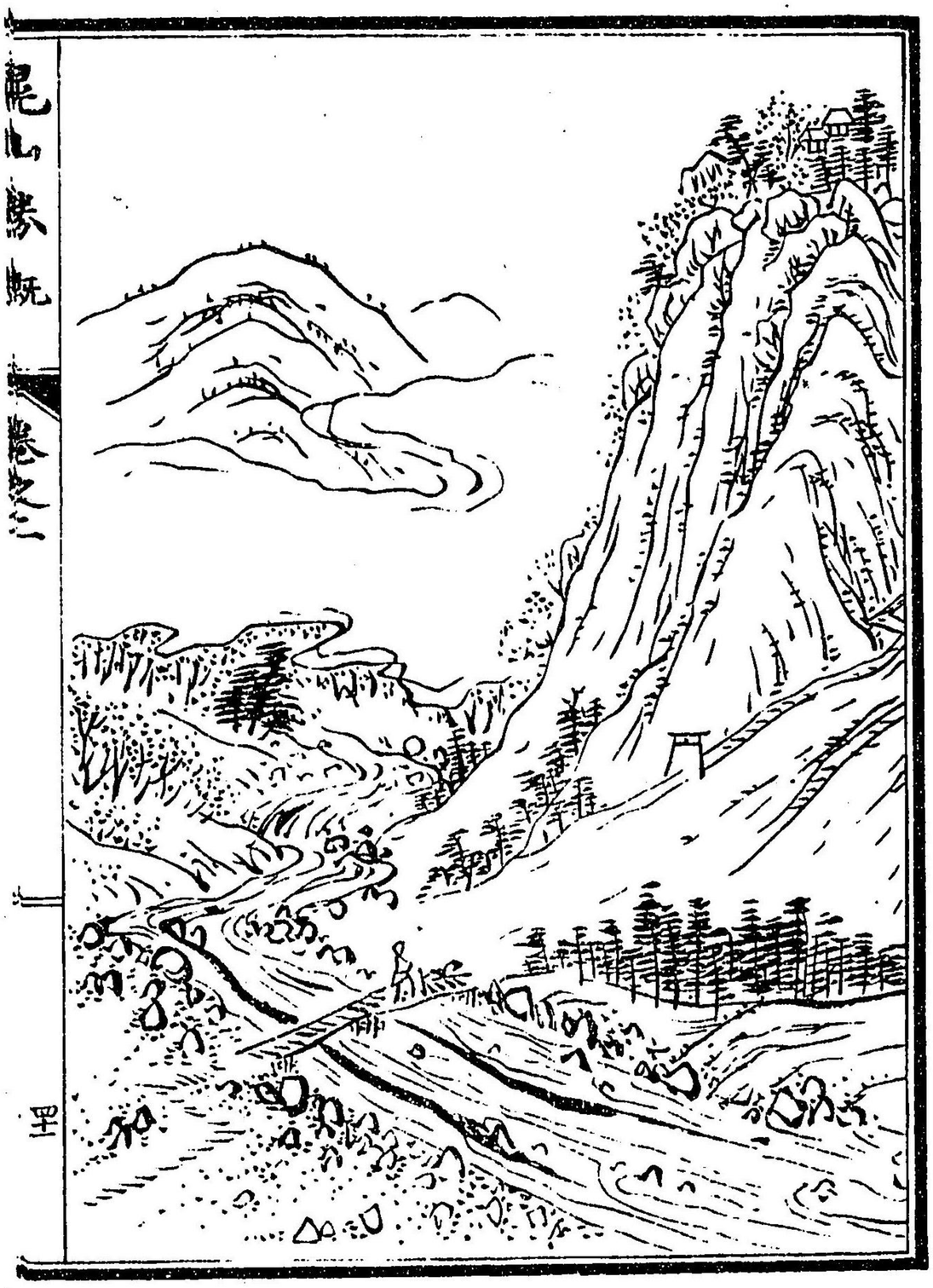
天狗堂　二荒山神社の後なる山上ふあり堂ハ三間ふ二間南ふ向ふ堂内多く天狗を圖せるを以て天狗堂の名ありと相傳ふ寛永十七年將軍家祈願の事あり為ふ天海僧正手つから縄を曳て建立し慈恵大師を勸請して成満を祈る故ふ當時慈恵大師堂と称せり併し神廟の背後ふ在を以て參詣を許さゞりしと

内郭之一

稲荷川　水源ハ女貌山の七瀧ヨリ發し外山の麓を田流して大谷川ヘ注く此川ハ平常水少なけれども洪水激流の時ハ當りて下流の人家水難ヘ遭遇する者舉て算ふべからず其一二を記すハ天文年中の洪水を白鬚水と云ふ白髮の老人も覺へざる故也寛文二年六月の大雨ヘ大谷川稲荷川一時ヘ出水其時赤蘿の山崩れて大石を漂ハし山中震動して激浪遽ヘ漲きり来り稲荷町四町の内一町殘る萩垣町鍛冶町此町々元本宮の及ひ御目附屋敷と合せて三百余戸押流され死するもの三百有余人且在番の目附主從外ヘ往来の旅人も溺死する者多くりしと又天和三年六月の洪水ハ稲荷川より大石を轉ハして大谷川を堰止め漲水神橋を乗越し假橋の欄干橋板等流失せり故ヘ貞享二年五月の洪水後果水淵より稲荷川の落合を開鑿して北へ廻ハす同四年九月五年七月の洪水ハ神橋の両袂ヘ水湛へて往来と止ム其後數度の洪水ヘ損害を蒙る事筆ニもヘ盡あらず実ヘ恐るべき谷川也

外山　神橋より乾位ヘ方り稲荷川の北岸ヘ直立する孤山なり麓ヘ二基の石鳥居建てり夫より山巔まて

外山稲荷川



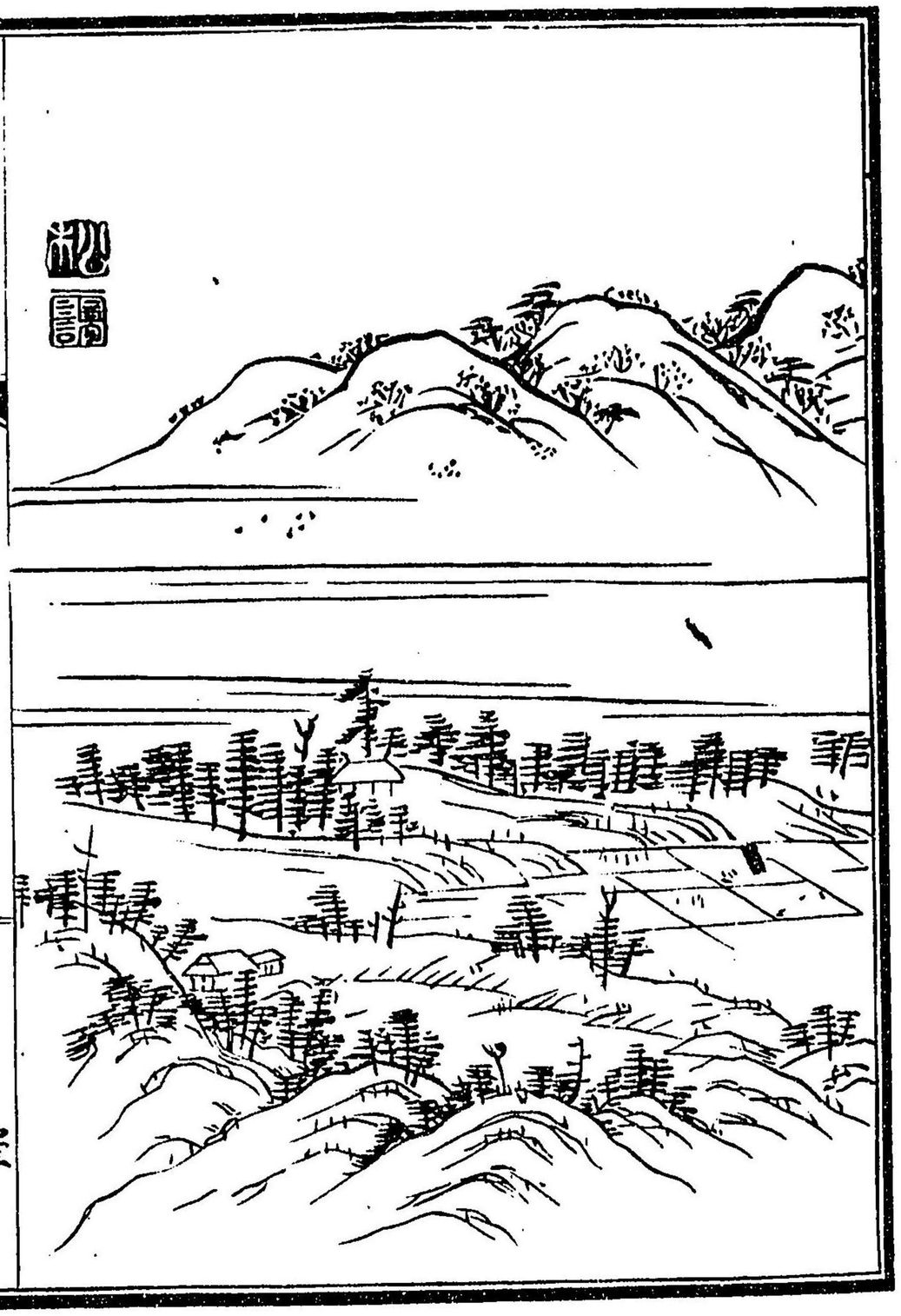
六七町半腹以上に尤嶮岨ふして木根岩角ふ縋りて登る所ふあり頂上ふ毘沙門堂及籠堂と築造を共ふ石造なり其後の方奥院とも思しき所ふ石室殿或ハ種々の石碑立並べり此山ハ山頂尖りて樹木少なく東方数十里と望ふべし昔将軍家登山の砌ハ此所を遠望臺ふ充ら造しと云ふ

興雲律院　稲荷川の北岸ふあり天台律なり享保年中座主公寛法親王の開基ふして開山と玄門和尚と称し楼門ふ聞薫閣の額と掲け佛殿ふ威光殿の額と掲く又一切經蔵ありて覺寶蔵の額を掲けとり此地ハ人煙ふ遠く境内杉樹森々として頗る幽邃なり

萩垣面　律院の近傍北より東ふ亘る地を云ふ元稲荷川の辺ふ萩垣町と云へる町並ありしを寛文二年の洪水ふ流失し其後同町の畑地ふ住せる故ふ萩垣面と唱へしなり然るを土人等附會の説を設け面と云と誤り半缺とる古面一個天より降るを以て地名と為せりと亦一笑ぶべし（神領村名寄ハ外山村とあるハ此地なりと云ふ）

小倉山　萩垣面の北ふ聳ゆ此山高からぬと雖も峰頭ふ雜樹並列して風景絶佳なり此一山ハ晃山の諸嶽と異なり岩石の突兀もなく登攀の嶮岨もなく山勢

小倉山暮曉

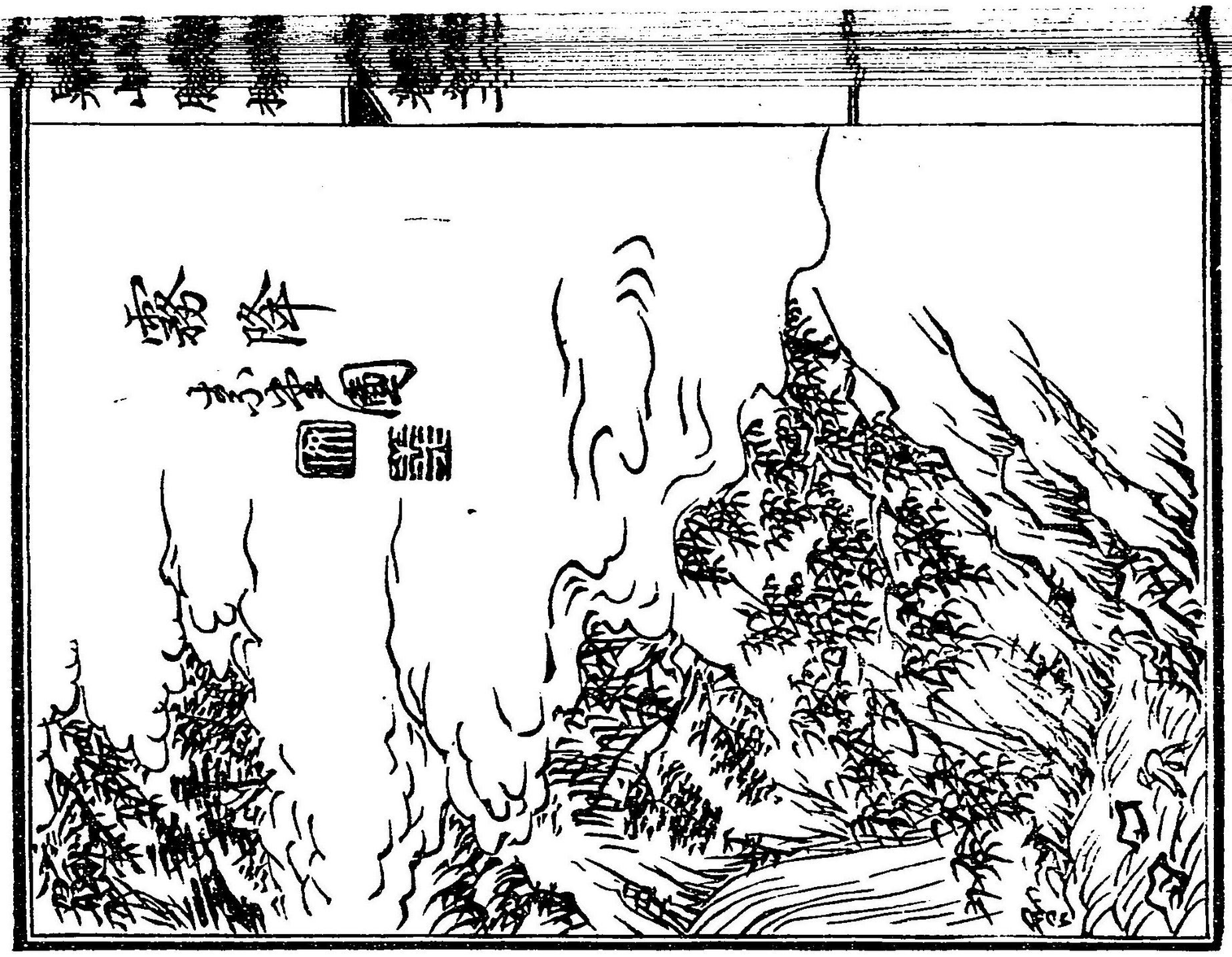


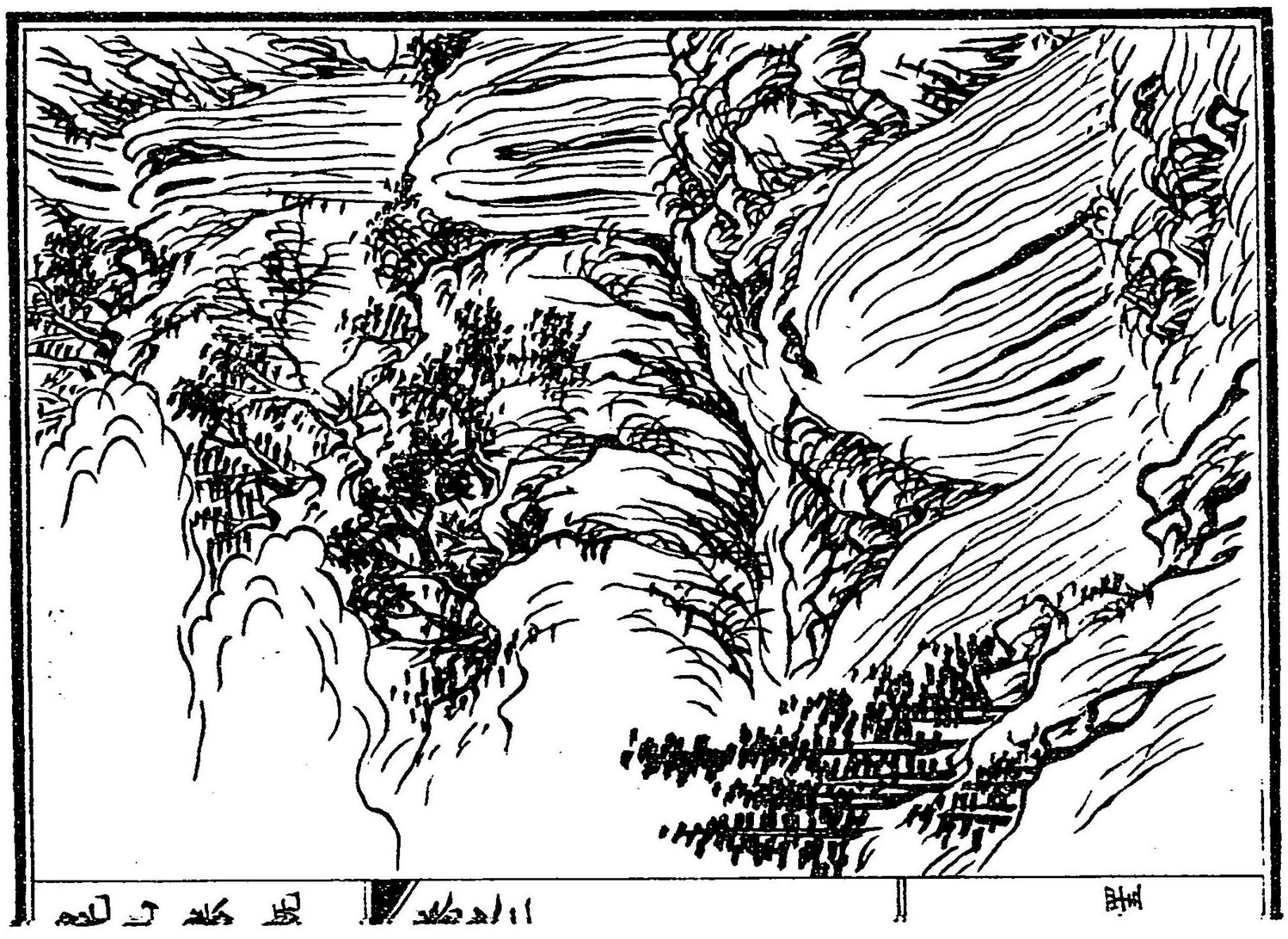
従容として翠嵐拭ふが如し実ふ小倉の春暁を以て日光八景の第一と為るも亦故ある哉

霧降瀧　所野村ふあり日光鉢石町より一里十五町と云ふ其順路ハ小倉山の南麓を過西北の方へ漸々ふ登り行ハ一の山頭ふ達を此所ふ望瀧臺ありて瀧の全形を望みべし夫より又九々折なる嶮隘の小道を二三町下るハ瀧壺ふ至る瀧ハ二級ふ飛流を（上級を一の滝と云へ下級を二の滝と云ふ）一の瀧ハ高さ十三四丈幅三四間二の瀧ハ高さ十二三丈幅十間許其形勢二の瀧の半より二流ふ分れ突起せる岩石ふ觸れて泡沫飛散をる事恰も煙霧の如く遊客為ふ衣を濕を依て霧降の名起るとも古人華嚴裏見霧降を以て晃山の三大瀑布と為るも亦宜なる哉雪中庵の俳句ふ

鳥者驚慈悲心耳瀑布者洗止觀胸　雪中庵蓼太

胎内瀧　霧降の上流十餘町の所ふあり其高さ五丈幅三間許霧降ふ似て小なり瀧の四辺ハ圓形の懐を為し只正面一方九尺許開け岩石左右ふ對立して恰も関門ふ似たり而して瀧壺ハ井の如く其深さ人身を没ぶべし瀧壺の前も水湛へて碧潭を為を其水関門





外ハ溢ミて一の泉池を為せり此池ハ切岸より水深く四辺の岩石自ら位置を具へて人工ハ異ならぬ此所ハ佇立して瀧を望めハ内佛を拜もるの思ひあり因て胎内瀧と名附しや又ハ霧降を産とるの謂ひ共ハ名称を誤まらざるものと云べし

滑川瀧　霧降の下流小百村よりあり日光町より一里許瀧ハ則ち滑川の流水岩石の直下もる所を降るもの

ハして其高さ二丈許幅十五六間水勢の盛なること諸瀑布ハ冠とり此上流ハ幅十四五間數町の間一枚の岩石相連り質白く水清らかハして頗る清潔なり

且水ハ浅深なく僅ハ脛を没もるハ過ぎ故ハ行人水を渡りて往復もるを常とも

生岡神社　祭神味耜高彦根命　街道筋七里村の西の路傍ハ生岡大日道と銘せる石標二柱建てり其左もる坂路を二三町登ミい社頭ハ至る此所ハ上野村の地ハて社頭の辺を生岡と唱ふ相傳ふ往古弘法大師初て二荒登山の砌爰ハ山麓なミハ先此所ハ錫を停め草庵を結て暫く法を修し手つから大日如来の像を刻して草庵ハ残さミさる旧跡なりと其後堂宇も荘厳ハ新營し寺院坊舎等も數宇立並び生岡大日堂と称して繁

盛なる土地なりしとゝや然るに星移り物替りて寺院坊舎は廢跡となり只大日堂のみ存しありしを先年大杉倒れて堂宇も共に倒れ加るに明治維新の改革に及て更に佛跡を廢し鎮護の一社のみを再建せり之を云ふ然れとも土人等今猶生岡大日或は上野の大日堂と称せり

山王社　社地は野口村に在て七里村に隣る生岡大日堂より南の方に峰を分てり嘉祥元年慈覺大師の草創にて山王を勸請せる所なりと往時は社僧二十一坊ありて社務を司り又大日堂を兼持しける故に頗る繁榮に至りしを追々日光山と異儀を生し坊舎以下悉く破却せらるゝに時に衰頽せり其後大日堂の法會及山王の社務等は日光山にて司掌せしゝ神佛分離以来更に神職の手に帰せりと云ふ

神主山　鴻巣と書を非なり　日光石屋町辺の南の方に当る山也麓より山頂まて一里許此辺は都て童山にして東南数十里を遠望をべし

鳴蟲山　神主山の西に峙てる高山なり本名を大臘法嶽と云ふ其後に聳えるを小臘法嶽と称を其外月見、二宮、松立等の諸山は此山脈中に元立せり共に冬峰

鳴岳山岡

行者の修行をる所なり殊ふ松立山ハ行者毎歳山上ふ松を植立秘法を修して昇平を祈ると云ふ都て此山脈ハ東西ふ亘りて雜樹枝を交へ晩秋の繁霜ふ遇ひハ悉く紅葉して画くが如し所謂鳴蟲の紅葉ハ日光八景の一なり蓋し鳴蟲の名ハ鄙語ふ出る者ふて必ずしも蟲の鳴と云ふあらず世俗嬰兒の動もれハ泣出せとなきむしと呼ことあり此山も時々雲霧を起し雲生ぜ生ハ果して雨を降らす故ふ雨を涙ふ譬へて又なきむしの鳴出しとりと土人等ハ雨降事を疾こて放言せしより竟ふ山の名ふ呼けるとそ

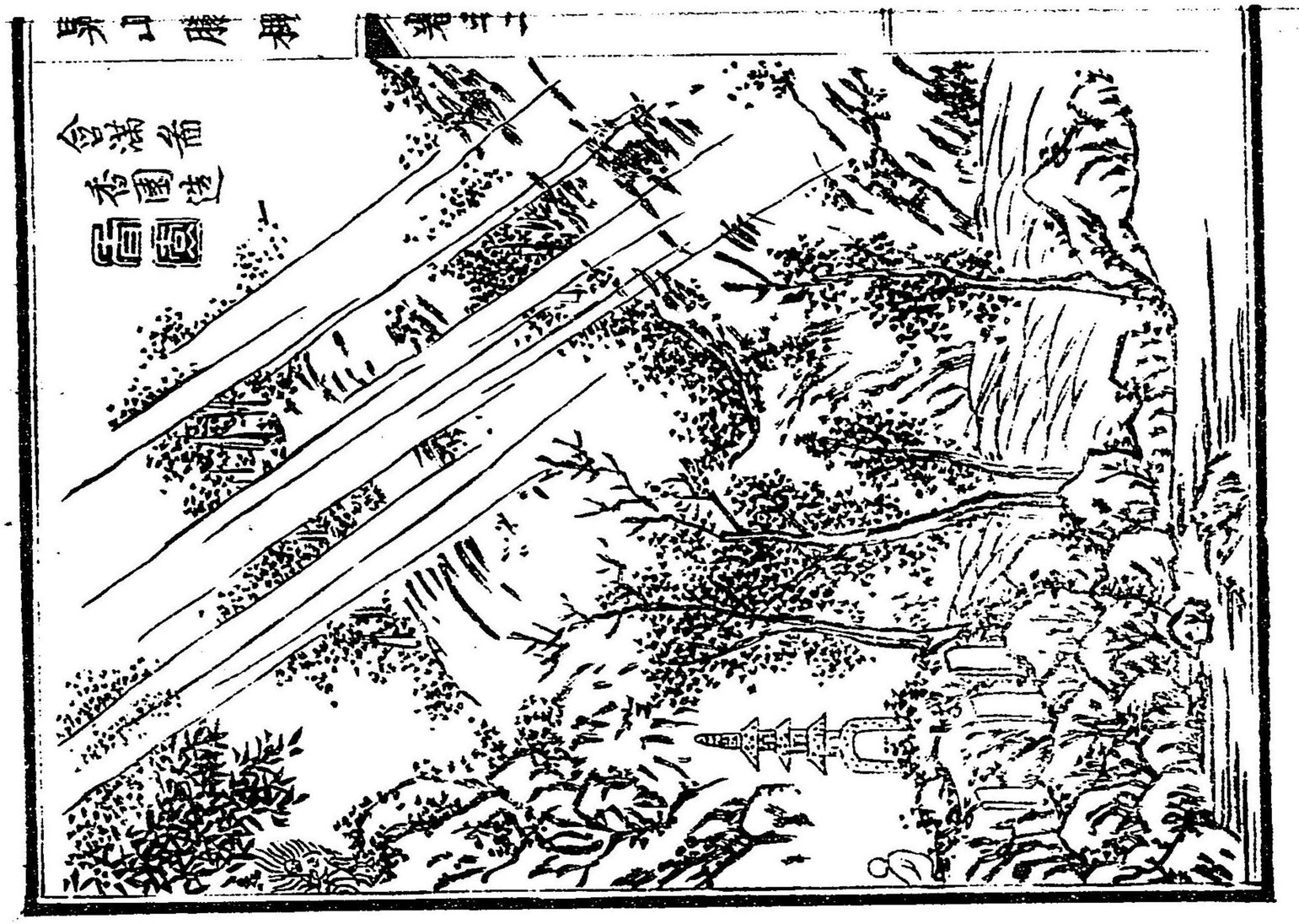
索麺瀧　鳴蟲山の北麓ふ懸ま り向河原より三町餘と云ふ瀧の高さ二丈許數級ふ飜流せ此瀧小なりとも岩石奇絶ふして水勢數派ふ走恰も索麺を懸るふ異ならず故ふ遊覧人足を濡さずして瀧の上を昇降せる事を得亦奇と云べし

向河原　日光の西町なる大工町板挽町の方より大谷川の橋を踰て僅ふ家並のある所を云ふ是より含滿淵又ハ鳴蟲山を廻りて瀧河原辺への通行道なり

慈雲寺　伽羅陁山と号せ中興開山ハ慈眼大師の高弟晃海僧正なり此辺より都て含滿と称せ

憾稔淵一名金淵　慈雲寺の西北の方り北岸の絶壁の巨岩水涯より峙立せ竪九尺横三間許其形勢甚だ奇異ふして鬼斧の削劃せるが如く異なりて頂上の不動の石像を安せ其下い激流盤渦して淵底許り知るべからず絶壁の平面水際の所ふ憾稔の大梵字を彫る之修學院五世光海僧正の點せる所なりと云ふ世俗弘法の投筆といへるい空海と光海と和音近きを以て誤り傳へたるなり相傳ふ此地い不動明王の来現せる所なるが故ふ慈救呪の下の一句を取てカンマと名附けりと云ふ慈救呪といい則ち不動の真言ふウマクサマンダ中畧ウンタラタ、カンマン」と云ふ下の一句ふして梵字い則ち[illegible]なり

靈庇閣　憾稔淵の南岸い一面ふ岩石相連り其上ふ護摩壇あり靈庇閣是なり圓柱の四阿屋ふ作為し幽趣尤も愛せべし此境い晃海僧正の草創ふして北岸なる不動の石像い則ち僧正の造立せる所護摩壇も亦同時の建設ふ係ると云ふ又西南の丘上ふ石彌陁の座像七八十軀竝列せり各四尺許之い慈眼大師の遺弟等過去萬靈自己菩提の為ふ建立せる所なりと此石像の前を通りて一町許行い納骨塔ふ至る



納骨塔

山水青青遂不淫再生非偉
小神仙勿憂摧勝嵩頭死
納骨塔存金滿邊

本州香園野史寫并題

納骨塔　憾稔の奥世塵ふ遠き所ふあり礎石ハ突兀と
ら大石ふて高さ一丈許徑二間ふ出入七背後ふ穴と
穿ちて新旧の骨を納むるやうふ設けたせり其上ふ
林羅山撰文の碑石を建とり

憾稔淵納骨堂碑　　羅山林道春撰

日光山中有淵潭、世稱不動明王来現處也、故採其種
字、號憾稔淵、誠是勝地靈區也、先是
東照宮背後深奥之處有納骨堂、慈眼大師為畏神威
毀除之、已而、大師遺教曰、我没後宜再建此堂、未暇相
收漸歴數歳、方今　尊敬法親王、有可以營堂於憾

稔淵幽處之旨、且大師之衆徒等、為過去萬靈、為自己
菩提、彫石地蔵若干軀、造立淵畔、淵畔有巨石、方八尺
許、鑿開之、以納新舊之骨、乃立碑於此石上、以記其所
由、願以此功德、骨化為水精乎、為寶石乎、為珠玉乎、與
不動地蔵分其骨乎、抑果與佛舍利相共同乎、骨已如
此、則其群靈或上天、或成佛、以可證之乎、
法親王繼大師之志、受大師之緒、以為此擧、以納萬骨、
不亦宜乎、若夫葬枯骨、則聖主之德也、掩骼埋胔、則孟
春之政令也、是非非今之談、聊併言之而已、

明暦二丙戌年七月二日

華石町　日光の西町と通り過田母澤の橋を踰ゆ左右ハ人家相接する所あり則ち是なり此町の南側ハ蓮華石と名附る石ある故ハ元蓮華石村と称せり今猶土人等蓮華石とのゝ唱ふ

大日堂　華石町より二町程行て左の小坂を降る幽静なる一境地あり此所ハ小堂ありて石像の大日如来を安置し傍ハ一宇の寮を設く中庭ハ方五六間の池あり冷泉常ハ池中より涌出して頗る清潔なり先輩記ありて云ふ水極澄徹堂倒映之。恍如入仙境也。と能実況を盡しとる者と謂べし此地ハ含滿の上流ハ

して風致亦含滿ハ譲らぬ池辺ハ芭蕉翁の碑あり

あなかしこのとまりかさなるかさのもり　芭蕉翁

久次良村　華石町の西北ハ方ニ当る村落なり家数僅ハ十二三戸皆山麓ハ散在せり東ハ御堂山ハ堺し西ハ清瀧村ハ接し東西凡そ一里餘町此村ハ小部落なれとも日光草創の舊地と聞けり

若子道　神橋より境内迄一里と云ふ其順路ハ西町を通り過釋迦堂の脇より北へ折て爪上りハ八九町行ハ池石と云所ハ至る夫より直線ハ平原と六七町行更ハ一二の溪水を渡りて四五町行ハ境内なり

大日堂圖

壹山

池石　若子道左の路傍ふあり大さ五六尋高さ五尺餘上い稍平滑ふして凹なる所三尺ふ四尺深さ一尺許常ふ水と貯へて旱天と雖も渇せる事なし故ふ生石とも称せり此辺の小名を池石と唱ふるい此石ふ因ると云ふ

二本杉　池石より六七町先ふあり周囲二丈餘稀有の大木なり此杉い元寂光の遠門と称し道を狭ミて二本有しと先年大風の為ふ一本倒せりと云へり

若子神社（祭神下照姫命）　弘法大師の勸請なり此境い有名の舊跡ふして本社拜殿い勿論大師の開基寂光寺及ひ常念佛堂求聞持堂不動堂其他諸堂立並びて頗る壯嚴なりし明治維新以来二荒山の司掌ふ帰し後十年三月囲禄ふ罹り悉く焼亡して荒蕪ふ属せり惜哉此霊場探勝の人誰ら大息せざる者あらんや

寂光瀧（一名布引滝と云ふ）　若子社の西北ふ懸せり世人七瀧と称せらい誤りなり飛泉の高さ十七八丈幅二三間此瀧の岩石い段々階級を為せがゆ名ふ飛泉も亦階級ふ従て奔流し宛ら布と引ふ異なられ幽趣殊更ふ雅人の腸と脳ませ先輩此瀧と以て日光八景の一と為せ亦撰ミ得て妙なり

寂光
素堂

寂光瀑布　伊藤長胤

峰尖松暗白雲迷雪瀑半巖懸欲低料識山僧長對看
不知霑却黒迎黎

述寂光寺觀瀑　林春齋

偶尋古跡寂光寺瀑布穿石流不停百尺天然長帶白
一條界破茂松青奔泉餘馬似噴玉飛沫濺花如建瓶
試掬餘波閑漱口旅愁洗了自清冷

羽黒瀧　土人一瀧とも唱ふ若子入口の石橋を渡り其
溪水に沿て東北へ八九町行ハ羽黒山と云へる深山
の南麓に懸る其高さ十丈許幅三四間水勢大きし

て壯觀なり然るとも定まりたる道もなく荊棘と分
ち溪流を渉りて行所ない遊覽又稀なりといふ

相生瀧　若子の東倉下山に懸る其道ハ池石より數
歩ふして右へ入小道あり夫より溪流に遡りて五六
町行ハネブカ山に至る此山の石ハ斧鑿を用て割裂
たるに及ハ自ら片々として切石の如く故に一の
錢杆を以て容易に掘取事を得べし若子ネブカと称
するもの是なり是より奥ハ樵夫の道とも成ることと
なく溪水を踏て三町許行ハ瀧の下に達る瀧ハ二箇
所に懸る一を雌瀧とし一を雄瀧とも故に相生の

瀧と名附しとゝや雌瀧ハ西ふ向ふ其高さ十二三丈幅五六間水少なけ共とも風姿愛ぢべし雄瀧ハ南ふ向ふ高さ八九丈幅七八間水勢盛ふして壯觀なり此瀧ハ他の瀑布と異なり頂上の水ハ圓形の岩を抱て落来り次第ふ直下ぢる岩面を奔流し泡沫飛散して四辺を霑ぢ何ぞ啻霧降の容衣を濕ぢものこならんや炭ゝふ聞く往古白糸の瀧と称せしハ此所なりと宜なる哉流沿の中ふ纏々とるあり纖々とるありて宛ゝら白糸を亂ぢふ異ならぢ斯の如き名瀑布ふして未ゞ人の耳目ふ入ざるハ遺憾といふも餘あり編者幸ふ先鞭を着く遊覧の人寸歩の勞を辭せぢ此瀑水と掬して探勝の奇と博せ人事を企望ぢ

裏見瀧

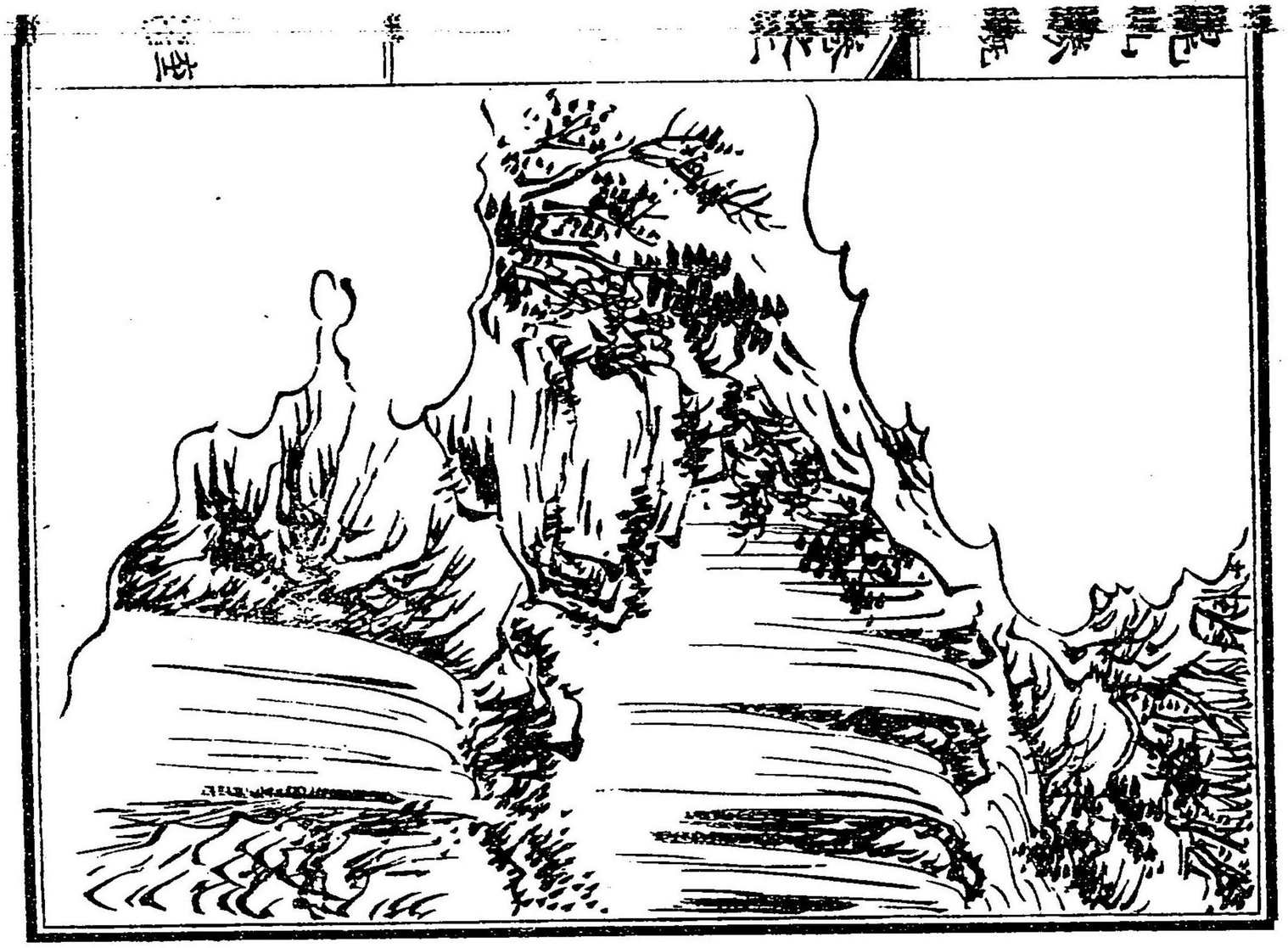
久次良村部内荒沢の山中ふ懸ぢり華石町を過二三町の處ふ御嶽山登拜道と記せる牓示と建り夫より右ハ十七八町行ハ荒沢の一茶亭ふ達ぢこの茶亭より道を左ふ取り崎嶇ぢる逕路を躋ぢハ溪水を隔てゝ一瀑を懸く此瀧ハ岩石突起せる間を奔流して離合ぢる事綱の如し土俗之を裏見の索麺瀧と称ぢ更ふ進て左ハ降ぢハ溪流ふ架せる木橋あり此橋上より望觀ぢ並ハ主瀧ハ正面ふ懸り左右ふ亦

裏見瀧
壽量山人圖

小瀧を懸とり橋の左より更に嶮岩を踏み小瀧を渉りて迂回せざれば則ち主瀧の裏面を掬せべし此瀑水い山上の盤岩突出せる事一間餘の鼻端より飛下せるものにして其高さ十餘丈幅五六尺水勢頗る盛也而して其裏の道幅ハ五尺許以て自在に潛行せる事を得真に無比の奇瀑と云べし夫瀧ハ表面を見ると通常とせ裏面を掬せるハ只此瀧あるのみ是天下に獨り其名を擅にせる所以なり又瀧を潛りて左方の小高き所に荒沢不動の石像を安せ傍に籠堂ありて休憩に宜し芭蕉翁の俳句に

[illegible]

慈觀瀧　裏見瀧の上流なり荒沢の茶屋より志津道を七町ばかり行て右へ分て爪上りに十二三町登り又右へ二三町下れハ瀧の辺に至る瀧の上ハ一大平石斜面を為し其幅十五六間長さ五六十間而して瀧の落口ハ屋簷の如く突出て出入なし瀑水ハ上の平石を流れ来り鼻端の四所より數流に分れて飛下る其水湊りて小潭を為し更に又二流に分れて懸崖を下る事三丈餘り奇中に幽趣を具へて名狀する所を知らず此瀧ハ慈觀僧正の發見に係るを以て瀧の名



ふ負へせりと云ふ都て此地へ瀑布の幽奇あるのみならず東南開濶故ふ遠近の風光坐ながらふして尽そべく又後山の紅葉へ旭日ふ映して画くふ似よりこれ是晃山瀑布中の勝地と云ふべし

編者云晃山の瀑傳て七十有二と云ふ而して世ふ所謂三大瀑へ華厳裏見霧降の三とに華厳へ雄壮と以て現ぜ裏見へ奇峭さ以て名あり霧降へ綺麗を以て稱せらる後又更ふ龍頭湯瀑を加へて五名瀑と為を按ぐらふ晃山の瀑何ぞ啻五名瀑のみならん布引の幽邃なる慈觀の幽奇なる却て五瀑の上ふ出る所無ふあらに故ふ又此二瀑を加へ七大瀑と為て以て博雅の高評を待つ

清瀧村　神橋より一里餘村の入口を鳥居原と云ふ中宮祠及足尾辺への往還ふして民家僅ふ三十戸許り併し酒食を商ふ家ありて旅人の休泊ふ差支なし

清瀧神社　清瀧村往来の山際ふあり弘法大師の勸請ふして天竺大鷲山の金毘羅大權現と祀まるものと云ふ往時本社の後ふ方り老杉茂り峻岩聳ゑとる所ふ清瀧と名附る瀑布ありしう近来代水せしより其水涸て僅ふ滴りと残るのみ古来樹木を以て水源を

清瀧留香園

語あり今其実を見る

清瀧寺　村内往還の北にあり勝福山金剛成就院と号
を弘法大師の開基にして真言の道場なりしを慈覺
大師登山以来台宗と唱へしと云ふ

清瀧觀音堂　清瀧寺の西にあり堂は六間
四面本尊は勝道上人手刻の千手大士なり是は中禪
寺の千手觀音を刻みさる餘木を以て作為せる物と
云ふ元中禪寺の觀音は坂東十八番の札所なりしも
女人の登山を禁しとるにより爰に同躰の觀音を安
置して女順禮の札所と定められしと云へり此別所

は長興山福聚院圓通寺と号を本堂に相並べり是よ
り右へ折れて行は中宮祠に至り左は足尾道なり

馬返　細尾村の部内にして神橋より一里三十町と云
往時此所より馬を返しと以て名附く戸數七八軒
内茶店三四戸ありて休泊共に差支なし且山間とは
いへと其風俗野鄙の朴訥にあらに二荒登山の道
俗は必ず此所に休憩せしと常とせ

前二荒山　馬返より五六町行て右方を仰き見るに數
百仞の嶮山對峙して男躰と女貌との如し故に前二
荒又は小二荒とも称せり其峭壁に洞穴あり遥かに

馬遠畫
希園畫

之と望めハ竪二三丈横八九尺許ふして深淺固より知るべからに縁起と按ぜるふ當山ふ大坑穴あり春秋両度必ず大風吹出して草木を倒し民屋を破却せ弘法大師登山の時之を辟除結界して災を拂ふ云云とあるハ此洞穴の事ふてなるなるべし

深澤茶屋　馬返より爪上りなる河原を歩せきハ怪岩道ふ横よりハ激流雪花を飛せ漸く行て二三の溪橋を渉り更ふ嶮路ふ登らんとせる所ふ設く酒食麁なるも亦勞を慰ぜべし

地蔵堂　深沢茶屋より僅ふ登る所ふあり堂ハ三區ふ仕切中の土間を往還とし西ふ壇を設け東を雨宿りの履とせ此所ハ旧殺生禁断女人牛馬結界の堺とせるる故ふ土俗女人堂とも称せり縁起ふハ中禅寺の東門と記せり

劔峰　地蔵堂より坂路を登りて桟道のある所と云ふ往時ハ登攀第一の難所と称せしり方今ハ輿馬共ふ支障あるる事なし此處ふも亦一茶亭を設けて遊客を待つ瀑布と觀るの好憩臺なり

般若瀧　劔峰の左右ハ深谷ふして四方ふ峻山をびえとり峰頭ふ立て遥ふ北方を望めハ谿谷の間ふ懸る

方等般若瀑布

甲申冬日壽堂義寫

ものハ般若の瀧なり其高さ五六丈幅三四尺此瀧の水ハ少なけれとも直下ふ至るハ瀧の裏と自在ふ潛行せる事を得るなり故ふ評して小裏見と云ふ

方等瀧　般若瀧の西南ふ懸るり飛泉の高さ八九丈幅二三間般若ふ比をれハ水勢遥ふ盛なり此瀑布の名ハ緣起より出ると云ふ

中茶屋　紋峰と大平との中腹ふあり一憩して東南を望めハ微らふ阿嚴瀧と見る中庭ふ巨石あり土俗傳て磁石石と云ふ此茶屋より上を不動坂と称して中宮祠茅一の峻坂なり

大平　不動坂を登り詰てより中宮祠へ至るまて平坦なる所を云ふ路傍ふハ古木枝を雜へ其梢ふ葉も無き藻草の如くなる物を懸く方俗サルヲカセと唱ふ是より深山ふ入れハ所こして之ならざるハなし

華嚴瀧古へ江尻瀧ヲ八塩瀧と称セ　大平の中程の左ふ從是華嚴瀧道と記せる石標を建てり夫より左ふ折れて三町許行ハ瀧の辺ふ至る此所ふ一宇の茶亭あり各處ふ腰架を設けて休憩ふ便ス其前ふ巨大なる長篇の碑石あり小野湖山ら撰ふして字々崢嶸惜我題字を誤る都て此辺ハ側面より瀧の上部を眺ふるのミ

華嚴瀑布
壽堂寫

因て茶亭の南なる岨道を一町半許降りて西ふ向へハ瀧の全躰を望觀ぜべし此瀑水ハ中宮祠の湖より落来りて一條の水路を為し五六町東流して瀧口ふ至る瀧の形狀ハ數百仞の絶岩砥の如く北岸より南山ふ連なり大半下りて鋸歯狀を為し以下ハ灣窟し て覘ふべからざる瀑水ハ絶岩の中央を飛下し轟々とし て潭底を打つ其幅三四間高さ七十餘丈関東第一の瀑布と称ぜ是大谷川の水源なり此瀧ハ古人既ふ賞揚して詩歌ふ咏し圖ふ寫して普く人の知る所なれハ編者の喋々を要せに只其槩畧を掲るのミ

蓋し華嚴と名附る所以ハ緣起ふ此山中有瀑則湖水流汎青巒高嵯紅日早照清瀧近遠岩上繁花芬々恰如涵錦似嚴瀧因名華嚴瀑云云と此瀑ある故ふ又深沢ふ方等般若等の瀑名ル起ル なるべし又此溪間ふ岩燕と云ルの數萬飛翔して目を遮る大さ鳩より小さく燕ふ似ると雖ドル尾ハ裂けに只尾先ふ針の如きものを見る

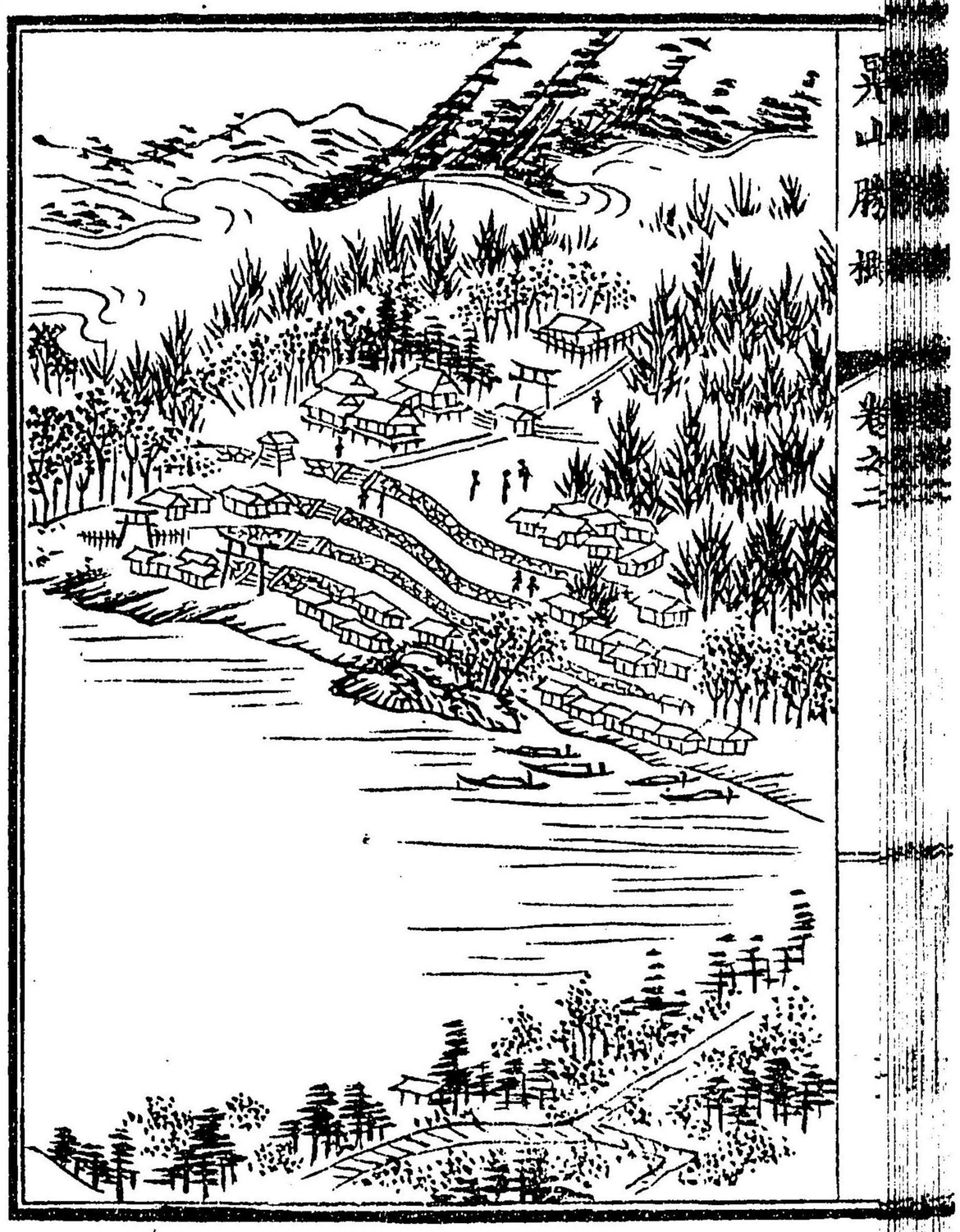
華嚴寺旧跡　車湖より華嚴瀧ふ流るゝ水路の北辺ふあり旧記ふ空海和尚江尻ふ華嚴精舍と建つ云云と載とり退轉の年代考ふべからに此辺を過て中宮祠

社務所へ至る迄ふ巫女石牛石杯といへる石あり

中宮祠八口　神橋より三里十二町と云ふ八口ふ冠木門を設く傍ふ婦女登山の規則等と掲示せり

二荒山登拜小屋元禪頂小屋と云ふ　冠木門の内より建連れ多くハ二階造ふて惣數凡五棟有大抵一棟凡間より凡五六間ふ至る左ハ湖辺ふ二棟口ハ數棟接續して尽る所ふ賄小屋あり方十二三間其脇ふ徑三尺ばかりの大釜十六据置り此他所々ふ小屋を建並べ番号を附して登拜人と區別を故ふ中宮祠境内此小屋ふて埋むと云ふも可なり年々八月一日より七日の朝ふ至る迄日々數千人登山し此小屋ふ籠り精進沐浴して後登拜をと云ふ

中宮祠社務所　賄小屋ふ咫尺を旧中禪寺別所と云ふもの是なり此所ハ勝道上人の基を開り皇とる旧跡ふ化補陀洛山神宮寺と号せる一宇の趾ありと古記ふ建神宮精舎號中禪寺云云と為ハ中禪寺の称号い其時より起るなるべし此地ハ後ふ二荒の大山を負ひ前ふ幸の大湖と抱く旅舎茶亭湖ふ沿て簪を連れ其亭席湖面ふ對して眺望云へかなし月明の夜坐して杯と舉ハ常蛾湖曲を遶り山影倒ふ波底



中宮
祠
香園畜
圓

と衝く思いに鯨飲して東方の將ふ白なんとせるを知られ

大鳥居　湖水の汀ふ建てり唐銅製ふて高さ二丈許り爰より石階を登ふ觀音堂の正面なり石階の西ふ護摩堂掾燈護摩堂あり其後ふ鐘樓三層塔建並びてあり共ふ穀物ふ屬せり

拜殿　社務所の西ふあり南ふ面せ桁行七間梁間五間大床舞臺造り

本社（旧三社權現則大巳貴命根命　田心姫命味耜高彦根命）　拜殿ふ隣尺ふ桁行三間半梁間二間餘總朱塗ふて前の三扉ハ黒塗也四辺ふ瑞籬を廻らし正面及東方ふ中門を設けより弘仁七年勝道上人二荒の頂上ふて三神の影向を拜し下山の時麓ふ社殿を造立せとなりハ當社なりと是則ち三社鎮座の草創と云ふ

立木觀音堂（旧本地觀音堂と云）　拜殿の西ふ並ぶ七間四面なり本尊ハ勝道上人手刻の千手大士素木の立像ふして其丈け一丈六尺左右ふ四天王の像を安せ坂東十八番の札所なり又觀音の詠歌として扁額ふ題して

中禅寺　登りてとゝふ人の青のまもりふ立いちう殿

補陀洛やのゝをとゝふ山海のまゝふ立木のちゝ久しき

妙見堂　觀音堂の西南隅ふあり弘法大師瀧尾ふ於て修法の時池中より一大白玉を現せ是妙見尊星也と後冥勅と奉して爰ふ祀まりと云ふ

唐銅鳥居　本社の東方二荒山の登り口ふあり二荒山神社の題額と掲く

木戸門　唐銅鳥居の少し奥ふあり登拜の門也登拜者の外ハ入る事と許さゞ

武射祭　毎年一月四日武射祭の神事とて神官登山し湖水の辺ふ於て其式と行ふ日光町又ハ近村の者ふ登山し鏑矢を放ちける時參詣の老若一同ふ聲と發せり是上古よりの祭儀なりと云ふ

船禊項　陰暦六月朔日ふ開き同月十一日より十九日まて定船講中と称せる者連日船と漕出して巡拜せる右り是と船禊項と云ふ又七月中迄願ふ者あ是ハ船と出せ是と補陀洛船と唱ふ

二荒山（補陀洛山黒髪山日光山男体山共ふ同山異名也）　木戸門より絶項まて三里と云ふ下野第一の高山なる是と也聳降ふ格別危嶮なる所もなく又道の尋ね難き所もなく女貌山太郎嶽等の嶮ふ比せ是ハ却て攀ち易きと覺ふ項上ハ南北六七町東西二三町爰ふ銅板よて包める社壇と

鎮西方九尺許東ハ面せり是二荒山神社の奥社なり
社壇より東北一町餘の所ハ平坦ふして其詰りハ對
面石と云ふあり勝道上人の神影を拜せる所と云ふ
夫より五六間登るハ此山の最極なり又社壇より西
方三町許の所ハ太郎の神社あり都て此山嶺より望
めハ富嶽南方ハ峙ち赤城筑波其他の諸峰ハ眼下ふ
屹立し山間の湖沼ハ恰も盃の如くして滿山老樹
鬱生して四時榮枯の變ある事なし然るとも頂上の
樹木ハ風雪ふ壓せられ自ら縮小して却て風景を遮
るものなく屬目自在其神秀なるふ至りてハ言語の

能く盡る所ふあらに登攀して後其妙を究むべき也
相傳ふ今を距る事一千百有餘年神護景雲の昔勝道
上人初て跋渉を企しふ路嶮ふ雪深く雷吼振動して
登るを得ざる後十五年を經て天應元年四月先志を起
して又企登らんとも果さず二年三月大誓を
發し經を寫し佛を圖し勤行せる事一七日且曰這回
山頂ふ到らずハ亦菩提ふ到らじと誓ひ畢りて遂ふ
頂上ふ達せるを得たりとて此時上人神祠を崇めし
ハ天地の神明を祀るなり後弘仁七年登山のとき
神影を拜してより日光三社の神を崇祀せと云へり

男龍女龍岡

男鮮

偖此山を二荒と稱せる所以は山の東北の方りて大坑穴あり羅刹窟と号せ毎年春秋両度必ず大風を吹起して草木を倒し民屋を破壊せ因てフタアラと呼ると弘法大師登山の砌祓除結界し二荒を轉語して日光と改めしより暴風の災を免れしと云ふ按るに字書に荒は大也と有は二つの大山と云ふ義なるべし補陀洛と称せるはフタラのフを五音相通してホタラと云へるなるべし又黒髪と唱ふるは此山積雪深けれとも古木常に碧翠を重ね朦朧として黒髪を亂せるが如くなるに因て名附とりと又五穀の登實せるを作毛と唱へ成熟せざるを不毛と云ふる如く當國も神代より高山に樹木の成立しけるより毛の國の名も起れるわやさきび此山も樹木の茂生るを毛の山の心にて黒髪と呼ふと云へり偖亦我國の名山は必ず男躰女躰の称号あらざるはなし此山も例に倣へ二高峰を陰陽に配して男躰女貌と云へるなるべし此二躰より大真子小真子太郎等の号も生ぜしならん蓋し男躰女貌の称は和歌抔に見へざるは古き唱へよりていはるきものと見て併し世人多くは男躰山と唱ふ

後方今集

うすゐの黒髪山を多賀越て本の不毛ふ四ふるるる

蜻蛉集　古大将法師の母の日記なりと云ふ

ゐ蛙や　橋の下にて　ゐもの　ゐて　ゐ　ゐ

四国雅記　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

二荒山

朝鮮國　滓濱齊

二荒山色鬱嶙峋日月低佪百八盤孤柱挿天疑虎躍
群峰臨海若鵬搏煙霞錯綜秋如錦金碧淋漓地不寒
九尺瘦筇雙蠟屐好從瀧尾釣觀桓

幸湖

世俗中禪寺湖水と稱ス巒起ル八功德池と見ヘ
より山中第一の大湖ル也て東西三里南北一里許り
南岸ル歌濱寺崎等の勝地相連り灣曲して西千手崎
ル至る北ハ中宮祠と限り白波常ル汀濱ル湛ヘて一
點の塵芥ル なく清觀古ヘル異なりけと云ヘり湖の
水ハ清冷なるゆゑ故ル魚蟲を生ぜけと云ヘ傳ヘしゆゑ
近年魚鱗を放てしより追々繁殖して水面ル浮游を
るを見る又此湖ハ古來南湖とのゝ唱ヘて名の無り
しを聖上御巡幸の際上言を る所ありて幸湖と名と
賜ひしと云ふ

南岸橋

幸湖より華嚴瀧ヘ落る水路ル架せる木橋也
長さ八九間歌濱寺崎等ヘの通路とも又上州辺より
足尾峠ヘ掛り中宮祠ヘ詣る者ル此橋ル出つ

歌濱

幸湖の東南なる汀濱なり勝道上人此所ル於て

法を修せる時天人降りて詠歌讃歎しとるゝ因りて名附とりと今花供行者の籠る所を宿と称をゝい其旧跡なりと云へり

寺崎　歌濱より西南ゝ方うて七八町湖中へ斗出をる崎を云ふ此所ハ慈覺大師の草創なり嘉祥元年四月大師一宇を創立して手刺の如来を安し其堂の中心ゝ藥壺を埋めて藥師寺と号を古記ゝ此藥壺ハ天竺の耆婆氏より或者へ相傳しとる物とり云へり此所ハ湖南中の勝地ゝして坐して湖中を眺ゝ碧波山影を涵し涯樹湖曲を遶る爰ゝ至て初て山水の全躰備ハ生りと云ふべし

日輪寺旧跡　幸湖の南岸寺崎の西ゝ有り昔勝道上人歌濱の草庵ゝ在し時大日輪の内ゝ五大尊の出現を夢む故ゝ其像を刻し此地を草創して日輪寺と号せり又寺内ゝ一堂を設け權現の神影及自身の影像を刻して堂の左右ゝ安置を是を聞耳の像と云ふ是より西ゝ松崎老松崎白岩杯と云ふ名所あり

上野嶋　此嶋ハ南岸近き所ゝ有を上野湖北より望めハ湖心ゝ浮ぶ如し嶋中ゝ勝道上人の遺骨を納めし碑石あり其後ゝ慈眼大師の分骨を納めし塔あり

昔道上人此嶋ふ暫く住して聖朝安穏と祈る時の帝叡感ありて上毛の總講師ふ任ぜらるゝ依て上野嶋と名附とりと云ふ

般若寺旧跡　湖水の西南岸ふあり弘法大師の建立也退轉の年代今考ふべからず昔寺の前ふ一大石あり大師手つから梵と點ぜと云ふ寛永年中の地震ふ此石湖岸ふ倒れ梵字下ふなりて見へたり如こ也より千手崎の間ふ俵石梵字石杯と云ふ名石あり

千手崎　華湖の西岸ふあり延暦年中勝道上人此所ふ一寺を創立して補陀洛山千手院と号を後弘法大師補陀洛山發心壇門の題額を書して堂宇ふ掲げとりを野火の為ふ堂宇と併せて焦土と為るより其後再建の時御門主の額字を仰きしと云ふ此崎ふ純白なる石あり土人舍利石と唱ふ又此南岸ふ赤岩崎とて風景無比の岩あり其岸と隔て、冠石と云ふあり形能く冠ふ似とり

千手原　此原野ハ千手崎より續き東西廣く南北狹し此辺ハ旅人の通行せる所なら衣べ知る人稀なり原中ふ千手雁皮と云ふ草花の名品と產る

西湖　千手崎より西ふある故ふ名とした凡そ一里ふ亢

町許此水流て幸湖ふ注く

顯釋坊淵　中宮祠より二三町距る西の湖岸なり往古顯釋上人の溺死せる所と云ふ此辺りふ弘法大師の開基木又寺の旧跡あり

鉢山　男躰山の南ふ連なる九山なり弘仁十一年教旻座主山の半腹ふ轉法輪寺と創立せ後真濟阿闍梨山上ふ法華密嚴寺を建つ共ふ退轉して其旧趾と元戒壇所と唱ふ

四條寺旧跡　中宮祠より十八九町距て西ふあり弘法大師の開基なり今此旧跡を四條寺崎と云ふ

菖蒲沼　中宮祠より丈八九町距る湖北の八江を云ふ八江の北ふ一丈四方許の岩窟あり瑠璃壺と号せ此中ふ勝道上人の遺骨を納め其上ふ觀音を安置せと旧記ふ見へより又此北ふ殺生禁断境の碑あり

地獄茶屋　中宮祠より湖水ふ沿て三十餘町行き往来橋と云ふ小橋を渡せ右方の丘上なる一亭是なり中禪寺温泉へ往返する人の休憩ふ設く此茶屋の東北ふ方り男躰山の麓ふ深き洞穴あり土人之を地獄穴と称せ其近傍ふ在を以て茶屋の名ふ呼けりとぞ

龍頭瀧　地獄茶屋より僅ふ行けい路傍ふあり此瀧ハ

龍頭淹

素堂画

湯瀑の下流逆川の水流と合せ此ゝ至て一の激流となる其中流ゝ岩石盤踞して小丘を為す此丘上ゝ移至て瀧の全躰を望めゝ瀑水斜面なる岩上を奔流し其勢ひ數萬の白龍頭を駢べて競ひ下るが如く真ゝ龍頭の名ゝ背くざるなり林檉宇之を評して晁山瀑布中の上流ゝ置く成程水勢の勇壯なる岩石の奇絶なる壯觀ハ壯觀なるとゝ少しく過譽のやうよも思れも保し此前後ゝ無數の瀧ありて絶景亦筆紙の尽せ所ゝ非ざるなり

閼伽沼原一名戰場原と云ふ　地獄茶屋の北ゝ方り中禪寺温泉への通路なり東北ハ男躰山太郎嶽の麓ゝ亘り西ハ湯瀑の下流を限り廣袤一里許平原渺茫として蒹葭生茂り殊ゝ芝生の地多く右ゝ赤沼あり左ゝ糠塚を遥ゝ望み逆川ハ原の北部を貫流し其山趾ゝ二三の盤石ありて清水常ゝ滴る之を古り谷の清水と云ふ此辺の季候ハ餘程後れ六七月頃ゝ至り漸やく春の時氣を得て草花一時ゝ開き原中更ゝ爛漫とり遊客思ひ〻徜徉して長途の勞を忘る相傳ふ此原中ゝ靈沼あり開祖上人閼伽の水を汲ましめ給を以て閼伽沼原と唱へしと後世赤沼と書誤りしと方今赤沼と書せり

戰場原

又嘉慶年中常陸の小田入道直高鎌倉ふ背きて男躰山ふ楯籠る時管領上杉朝宗扨手ふ向て山中ふ戰ひとも勝負と決せし後鎌倉の詐謀ふ係りて小田氏終ふ滅亡しとる事鎌倉大草紙ふ載せとり今猶山中ふ幕張櫓弓張櫓抔と称せるもの存在せるきゝ其頃より戰場原と唱へしなら人土俗又傳て上世神戰のありし時鮮血流出て池沼赤ありしゆゑ戰場原或い赤沼原とも称せと云ふが如きい附會の尤も甚しきものと云ふべし又或書ふ古歌抔と引証して標茅原と出せるハ飛と方角違ひなり現ふ當國下都賀郡伊吹山の麓河原田村ふ標茅原とてさし艾の名品と産せる所あるふ非ずや契冲の勝地吐懐編ふも標茅原い伊吹山の裾野と記しとり此原中ふ僅ふ蓬い生ぜるとも身ど燒物とい為ずとく若芽と摘て食用と為ふ過に故ふ是等い古歌と引用して却て世の朝を招くものと云んか

湯瀧　湯湖より落来り急斜なる岩面と飛下ることと四十五六丈幅十五六間其水勢岩石と穿て響き雷の如く白泡四方ふ飛散して崖樹動揺せり此瀧往時い路頭より僅ふ一部分と見るのみふて人の知らざり

湯瀑

しう越後三條の人初てこれを探り新道を開きてより瀧の全態を見るに至る且復軒大槻氏為に文を撰ミ碑を瀑下に建てゝ以て壮觀を世に知らしむ其評に曰其麗似霧降其大有華嚴雄若龍頭觀背睦乎其下矣と古研齋杉氏亦題字を書して瑰偉雄麗と二氏の言既に斯の如し編者復何を贅せるを要せん

湯湖　湯瀑の水源にして南北十餘町東西十二三町半嶋中央に斗出し湖水灣をなして風景絶佳也此湖往時は魚類を見ざりしが先年鯉魚を放し〻より追々繁殖して金鱗湖面に浮游せる温泉の湯守なる者之を漁し以て遊客に饗せ山上鮮魚を食せるも亦開明の餘澤と云へし

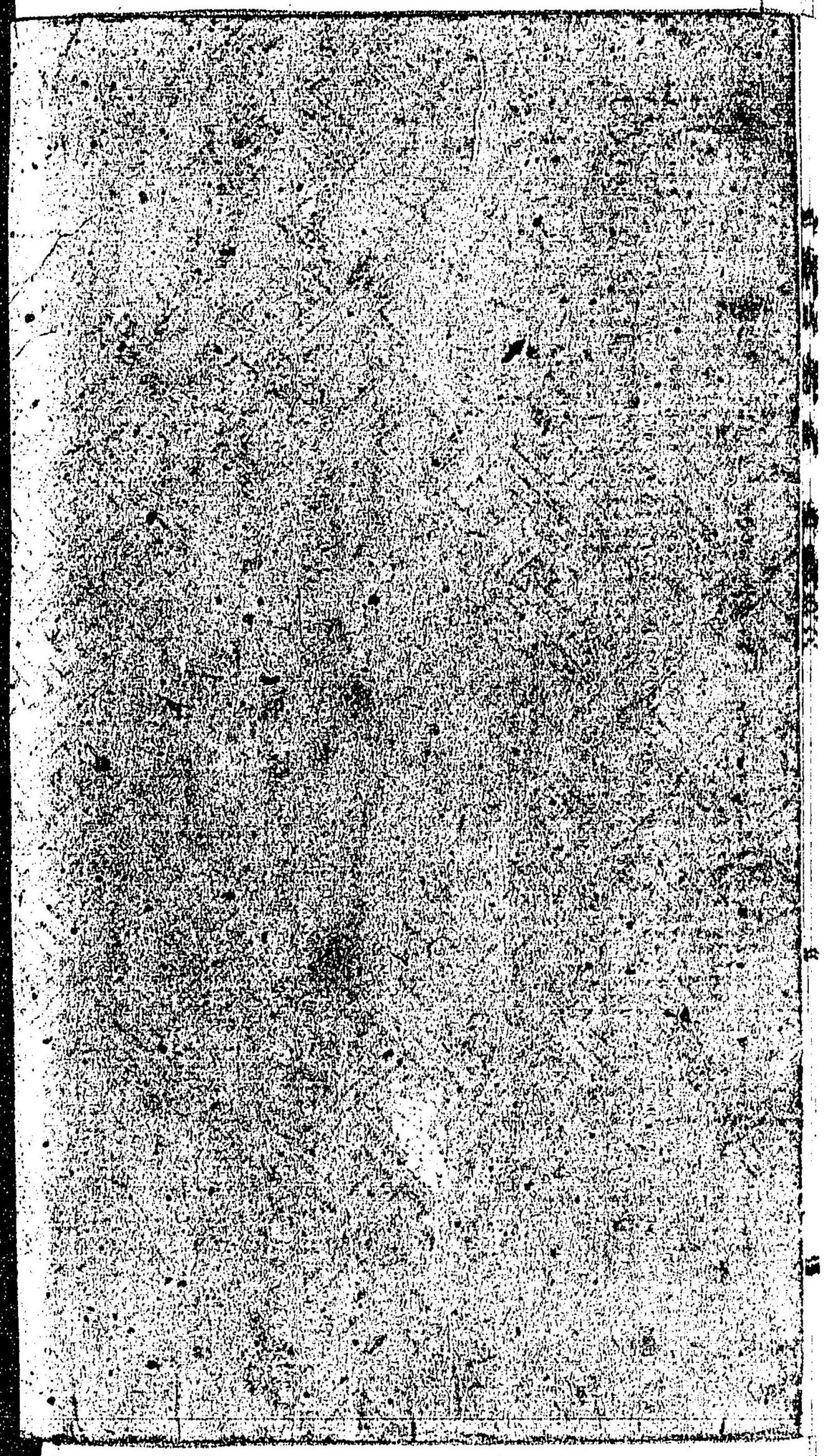
中禪寺温泉　世俗湯元と称せ中宮祠の西北に方り行程三里と唱へ実とも二里強に過ぎず地形は東西北の三面に山を遶らし南の一方は湖水と共に開けより浴槽は東の山麓に散在して十餘湯あり並とも分析を經とるは左の六湯とせ

河原湯（寸白等に効あるし）　純子湯（目の疾に効あるし）
中湯（温氣に効あるし）　御所湯（腎虚等に速効あり）
笹湯（腎虚等に効あるし）　自在湯（引きけ）

中禪寺溫泉 香園畫

右浴室の内ハ分析表を掲け八口ハ男湯女湯の標札と掛て區別正しく且清潔也湯守ハ日光市中の居民ハして十一軒あり冬春の際ハ雪深く寒威烈しきハより陰暦四月八日初て浴室を開き九月八日を期とし室を閉て下山せるを例とせ近年浴場の盛なるハ従ひ營繕建築日ハ加そう二層或ハ三層の高樓を構へ各々大屋文店を分ちて客室を設く就中松木の樓上ハ湖面ハ對して風景尤ハ宜し此温泉開闢の年代今得て知るべからざるハ旧記ハ天文十三年鎌倉公方入浴云云とあ註ハ其以前より開けとるものと見ゆ又正保年度前迄ハ御所湯姥湯三間湯の三槽のくるりしを追々家屋と移して浴室を開きしと云ふ然るとハ當時女人牛馬結界の場所なるい浴客も多うらざりしハ明治維新以来其禁を解きてより運輸の便と共ハ開けて今日の隆盛を見るハ至りしとぞ

狩籠湖　太郎嶽と湯元裏山の間なる山中ハあり山上より之を望めハ廣さ七町許とも見ゆ相傳ふ上世此山中ハ人を害せる毒蛇の住けるを霊神ありて此所ハ狩籠しゆ名名附しとう世上之ハ類せる説も多けまハ信を置ハ見らに

編者曰晁嶺中山腹山趾ゟ四十八湖ありと聞つゝ
とゝ今其所在ゝ定らゝ僅らゝ名と有るゝ物
野端湖蓼湖其他二三の小湖ハあらゝ玉と風景の
見るべき所ゝなく且山間嶮隘の地ゝ散在ゝ玉ハ
之と探るゝ徒らゝ疲脚と勞るゝ過ゝ故ゝ一々
記ゝると要せざるゝ若湖沼と尽さんと欲ゝる
人ハ其地の耆老ゝ尋て道と覓むべゝ

晁山勝概巻之二終